The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	笑う舞鶴 ： 「シリーズとつとつ」実践報告
Author(s)	西川, 勝; 豊平, 豪; 森, 真理子 他
Citation	Communication-Design. 2012, 7, p. 39-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7548
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

笑う舞鶴
－「シリーズとつとつ」実践報告－

西川 勝（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）
豊平 豪（一般社団法人　torindo / まいづるRBスタッフ）
森真理子（一般社団法人　torindo代表理事 / まいづるRBアート・ディレクター ）
砂連尾 理（ダンサー・振付家）
淡路由紀子（特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」/ 施設長）

Laughing Maizuru
–thinking in totsu-totsu action–

Masaru Nishikawa (Center for the Study of Communication-Design : CSCD, Osaka University)
Takeshi Toyohira (general incorporated association torindo / Maizuru RB)
Mariko Mori (Director of general incorporated association torindo / Artistic Director of Maizuru RB)
Osamu Jyareo (Dancer,Choreographer)
Yukiko Awaji (Special nursing home for the elderly Graceville Maizuru)

まいづるRBの企画によって、2009年から舞鶴市の特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」で取り組まれていたダンスワークショップは、ダンサーである砂連尾理と認知症高齢者の舞台公演「とつとつダンス」を、2010年3月に成功させた。公演後もダンスワークショップは継続されることになり、認知症ケアにおける身体コミュニケーションの可能性を探る一方で、人と人の間に息づくケアの経験をもっとありのままに記述するための勉強会や、多様な価値観や文化に関する理解を深めるために対話を中心とした文化人類学カフェ活動が統合されて「シリーズとつとつ」になっている。
「シリーズとつとつ」は施設介護の関係者のみならず、地域のさまざまな人たちの関心を呼び起こして2年間継続中である。高齢者施設の新しい方向性を示唆すると共に、地域における人々の協働のあり方のひとつとして、途上にある未完成の実践報告を行う。

‘Totsu-totsu (in a halting or faltering way) Dance’, a stage performance by dancer Osamu Jareo and a group of elderly people with dementia has been successfully presented in March, 2010. The performance was based on the series of dance workshop sessions initiated by Maizuru RB and conducted since 2009 at Grace Ville Maizuru, a special nursing home for the aged. Since the performance, dance workshop sessions have been continued as an ongoing search for possibilities of bodily communication in dementia care. Together with study sessions aiming to find ways to describe moments of truth in relationships between caregivers and caretakers, as well as the ‘Cultural Anthropology Cafe’, a project looking for ways to establish dialogs between people of different cultural backgrounds with different values, the three became integrated as the unified ‘Totsu-totsu Project’.
The Totsu-totsu Project has been running for two years, attracting a growing interest not only among those related to the care institution, but also among various people in the community. This paper is a report of an ongoing practical attempt to structure cooperation in the community and suggest new ways for facilities for the elderly to evolve.

キーワード
とつとつ、ダンス、特別養護老人ホーム
totsu-totsu, dance, Special nursing home for the elderly

「とつとつな音」（美術家・伊達伸明）

目標達成欲の強い人は、とつとつが許せない。
それが発展途上に見えるから。
仕切るのが好きな人は、とつとつが許せない。
それが牛歩戦術に見えるから。
オチがないと気がすまない人は、とつとつが許せない。
それが阿吽の呼吸に依らぬから。
若さの秘訣は？などという人は、とつとつが許せない。
それが身体の限界に見えるから。

未整理の過去と手さぐりの未来との間に
点描でしか描けない現在がある。
それを描く音、とつとつ。

1. 舞鶴に集まったとつとつの重なり

1.1 それぞれのとつとつ

本稿では、京都府舞鶴市にある特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」を地域のなかで「文化の糸車」に変貌させつつある「シリーズとつとつ」の実践経過を、その参与者たちの共同執筆の形式で報告する。共著者であるわたしたちは、それぞれに背景を異にした活動を、それぞれの場所でとつとつと実践してきた者たちである。舞鶴という土地でダンスとケアが出会う「とつとつダンス」を機縁として、わたしたちも出会いを重ねてきた。アートプロデュース、ダンス、文化人類学、臨床哲学、高齢者介護が、ゆっくり、じっくりとその手をつなぎ、足並みを合わせて歩み始めて「シリーズとつとつ」が、舞鶴の地に根付き、多くの人を誘う花を咲かせるように成長してきた。まずは執筆者の紹介を簡単に行う。

○森真理子は、「とつとつ」の仕掛け人。

1977年、愛知県生まれ。南山大学文学部人類学科卒業後、名古屋市内にある古川美術館の学芸員や愛知県文化情報センターでの仕事を経て、2003～2006年まで、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター制作スタッフとして数々の舞台作品の企画制作に携わる。その後、フリーランスで演劇・ダンス・音楽・美術など幅広いジャンルで企画制作を行う。2007年

よりシアターカンパニー「マレビトの会」プロデューサー。2009年より舞鶴市在住。舞鶴市でのアート・プロジェクト「まいづるRB（アール・ビー）」のディレクターとして活動。「まいづるRB」とは2009年度より、舞鶴市とNPO法人赤煉瓦倶楽部舞鶴が協働し、舞鶴赤れんが倉庫群を拠点に始まったアート・プロジェクト。赤れんが倉庫を使った芸術文化活動の提案等を行う。市民やアーティストがネットワークを結び、舞鶴の人や地域にある資源を再発見しながら毎日を楽しむプロジェクトを目指す。2010年度からは、市や同NPOと独立した企画も数々行い、活動の場を赤れんが倉庫に限らず、市内の老人ホームや学校、商店街などにも広げている。

2012年、非営利芸術活動団体「一般社団法人torindo」を立ち上げ、代表理事を務める。

○砂連尾理は、「とつとつダンス」の中心者。

1965年、大阪府生まれ。振付家・ダンサー。大学入学と同時にダンスを始める。1991年より寺田みさことダンスユニットを結成。93～94年、ニューヨークにダンス留学。また、近年はソロ活動を展開し、舞台作品だけでなく障がいを持つ人やホームレス、子ども達とのワークショップも手がけ、ダンスと社会の関わり、その可能性を模索している。

2002年7月「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞」「オーディエンス賞」W受賞。2004年度京都市芸術文化特別奨励者。

2008年10月より、文化庁・新進芸術家海外留学制度の研修員としてドイツ・ベルリンに滞在中。この間、障がい者カンパニーであるTheater Thikwaの作品制作に振付家として参加する。近年の作品に、「Thikwa-循環プロジェクト」（ドラマトゥルク・中島奈那子）、舞鶴のお年寄り達との「とつとつダンス」、垣尾優、Hyslomとのゲリラ的な活動「The pursuit of new possibility」等。立命館大学、神戸女学院大学非常勤講師。

○豊平豪は、「とつとつ人類学カフェ」の中心者。

1977年、鹿児島市生まれ。南山大学文学部人類学科卒業後、同学大学院博士前期課程を終了後、大阪大学大学院人間科学研究所人間科学博士後期課程を単位取得退学。沖永良部島やフィジー諸島共和国で政治文化に関する論文を執筆。2008年より豊中看護専門学校にて文化人類学と社会学を教える。2009年秋より舞鶴に移住し、まいづるRBのスタッフとして活動。2010年7月より特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」で文化人類学カフェを行う。2010年4月より一般財団法人地域公共人材開発機構北部オフィスの職員としても活動。

○淡路由紀子は、「シリーズとつとつ」の推進者。

1963年、京都府八幡市生まれ。2003年に社会福祉法人グレイスまいづるの設立メンバーと

なり、20年余り勤めた舞鶴市を退職。2005年4月、京都府北部初、全室個室ユニット型の特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」（特養80人、ショートステイ20人、デイサービス30人）の施設長に就任。

○西川勝は、「とつとつ勉強会」の中心者。

1957年、大阪生まれ。関西大学2部哲学科在学中より精神病院に勤務をはじめて、看護の道に向かう。大学は中退して看護学校に進学し、働きながら看護師免許を取得。20数年間を精神病院・人工血液透析・高齢者介護の現場で過ごす。40代になって看護師として働きながら、大阪大学の臨床哲学活動に参画する。2005年より大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの特任准教授、2010年より特任教授として活動中。認知症ケアを中心に、コミュニティをベースとしたコミュニケーションデザインを試行する高齢社会プロジェクトを推進中。著書に、『ためらいの看護』（岩波書店）など。

1.2 「シリーズとつとつ」の概要

2009年11月：特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」で、砂連尾理のダンスワークショップが始まる。

2010年3月7日：「とつとつダンス」発表公演。まいづる智恵蔵

2010年4月：砂連尾さんのダンスワークショップ継続。（2012年3月15日現在まで16回開催）

2010年7月22日：豊平豪「文化人類学カフェ」開始。（2012年3月15日現在まで15回開催）

2010年12月10日：西川勝「とつとつ勉強会」開始。（2012年3月15日現在まで11回開催）

「シリーズとつとつ」は「とつとつダンス」公演の後、2年間で計42回開催されており、参加者総数は約500～700名になる。参加者は多様な人々で構成されており、グレイスヴィルまいづるの入居者（要介護高齢者、認知症高齢者を含む）や看護・介護職員、事務職員、栄養科職員だけでなく、近隣の住民（小学校教師、中学校教師、主婦、学生、自衛隊員、府職員、団体職員、自営業者、会社員、フリーター）、遠方からの参加者（ダンサー、舞台芸術家、映像作家、写真家、歯科医師、理学療法士、NPO職員、大学教員、大学生、新聞記者、出版業者など）も多く参加している。年齢、性別、職業の異なる人たちが、身体ワークショップ・人類学カフェ・勉強会の複数に共通して参加していることも特徴的である。ケアとアートが出会い、そこに哲学や文化人類学といった知の活動が巻き込まれたのが特別養護老人ホームという場所だった。施設でくらす高齢者や、施設職員、地域の人たちや、遠来の客人まで、さまざまな人が、ともに身体を動かしながら交流して、自らの新たな感性に気づく。また、言葉を交わし合って、おたがいの考えを深めていくのが「シリーズとつとつ」の目的である。

2. 「とつとつダンス」公演の以前・以後

2.1 「とつとつダンス」公演レポート（豊平豪）

2010年3月7日曇り、砂連尾理（じゃれおおさむ）によるまいづるの企画『とつとつダンス』は舞鶴市のこじんまりとした赤れんが倉庫群で行われた。

2009年11月から4ヶ月に渡って、舞鶴の特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」で行われたワークショップの経過発表『とつとつダンス』は、まず鑑賞者を戸惑わせるところから始まる。

アクティング・エリアを縦二つに裂いて客席は中央二列に並ぶ。対角線上に設置された二つのスクリーンには、老人ホームでのワークショップの光景が映し出されている。どちら側を観るという指示もなく、開始の合図もなく放置されている以上、鑑賞者たちは所在無くスクリーンを眺めるしかない。ようやく砂連尾理が話しはじめ、パフォーマンスが開始されるのだが、彼の合図も鑑賞者である自分たちの頭上を通り越して、対角線の向こうに座る高齢の女性谷口さんに向けられている。砂連尾理と彼女のどちら側に向けばいいのだろう。目の前の出来事をどうトレースすればいいのか、全体で何が起こっているのか。戸惑うしかない。

このような〈戸惑い〉を鑑賞者たちに常にかみ締めさせながら、パフォーマンスは進む。

（写真１ 「とつとつダンス」より）

そして、興味深いことに、〈戸惑い〉は出演者である高齢者たち、子供たち、砂連尾理とダンサーの間にも通奏低音のように響いている。

パフォーマンス中に、老人ホームの出演者の一人ミユキさんに話しかけても、言葉のキャッチボールにはならない。こちらが、どんなに言葉を費やしても、基本的に、彼女は抱いている赤ちゃんの人形に話しかけているか、窓の外の風景について話すだけだ。興味があるのに、いつも砂連尾理の動きをみているのに、ワークショップに参加してこなかった上述の谷口さんもいる。耳が不自由なために、この人との言葉でのコミュニケーションの多くも空振りに終わる。もう一人映像でのみの参加となった伊藤さんも機嫌よく踊っていたかと思うと、突然「こんな意味のないことをしてどうする‼」と怒り出したりする。

「ミユキさん、その赤ちゃんの人形の名前なんていうの？」

「（赤ちゃんの人形に向かって）ぼくちゃんは名前なんていうの？まつげが長いねえ」

「ミユキさん、緊張しとる？お客さんいっぱいおるよ」

「そうやねえ」

これはパフォーマンス中にスクリーンにライブで映される出演者の陽生（はるき）とミユキさんの会話だが、まったくかみ合っていないようにみえる。だが、その現場を目撃すると、どこかで通じあっているようにもみえてくるのだ。二人の戸惑いながら切り結ぶ、身体をも含めた全的なコミュニケーションのなかに何かがみえてくる気がする。

付け加えておくが、砂連尾理は観客たちに〈戸惑い〉を与えるだけではない。ダンサー砂連尾理の身体はもちろんのこと、高齢者でも子供でもない若いダンサーの身体もそうだ。美術家伊達伸明の弾くウクレレの音色、全体を引き立てる抑制の効いた音響、スクリーンに映し出されるライブ映像と記録映像。随所に工夫がこらされている。これらの要素が精緻に考え抜かれた舞台のフレキシブルな構造に組み込まれ、コミュニケーションの実験を支える。

そして、〈戸惑い〉をはらんだまま「とつとつダンス」は唐突に終わる。片隅で伊達伸明がウクレレを引き続け、子供たちは鑑賞者の間や周りをうごめき続ける。若いダンサーが窓際に座り、砂連尾理が黙って寄り添う傍らにミユキさんと谷口さんが出窓に座る。スクリーン上でもライブで流れている静止画のような風景が、遊んでいるような子供の動きにかき乱される。最後まで何が起こるかわからない緊張感をはらみつつも、なぜだか気持ちがゆったりしてくる。

砂連尾理の「終わります」という宣言がなければいつまでも見ていたい光景。僕は、今でも繰り返し、その光景をかみ締めながら、このとき感じたコミュニケーションの可能性について考えている。僕らは戸惑うかもしれない。でも、もしかたら、近代社会が前提にしてきた「個」が止め処もなく加速し、流暢なコミュニケーションが持てはやされ、そこからはずれるディスコミュニケーションたちがあまりにもないがしろにされている今、それこそが考えなければならないことかもしれない。

2.2 「とつとつダンス」公演レポート（西川勝）

赤れんが倉庫の2階で、静かに始まった「とつとつダンス」を観ているうちに、ぼくは次第に落ち着かなくなってきた。バックに流れるしんみりとしたウクレレの音に不似合いな自分の胸騒ぎか何なのか、よくわからなかった。

公演は、砂連尾さんと二人の男子小学生、一人の女学生とグレイスヴィルに暮らす二人の女性入居者の計6人が、さまざまに絡みながら進行していく。出演者のうち、ミユキさんだけは自分が舞台に登場するという明確な意思の有無を確認できない。

ダンスの終盤近く、ミユキさんが階下の控え室から舞台に上がってきた。やせて細い顔には大きな瞳が見開かれている。周囲の観客を見渡して、不思議そうな視線をちらりと送る。彼女の横には砂連尾さんが一緒に歩調を合わせて付き添っている。砂連尾さんを頼るような、そうでもないような不安げな足取り。誰に向けるわけでもない小さな声でつぶやく姿。微笑んだかと思えば、考え込んだ表情に曇ってしまう。彼女がいまの自分の状況をうまく飲み込めていないのは、誰の目にも明らかであった。そのミユキさんの頬に、ゆっくりと砂連尾さんの細く長い指が伸びていく。戸惑いの気色を見せるミユキさんを、しっかりと見つめながら、砂連尾さんの身体がしなうように彼女に近づき続ける。

観ているぼくは、はらはらしてくる。きっと、この場面は崩れてしまう。そう思ったとき、砂連尾さんの両手がミユキさんの顔面を覆ってしまった。けれど、ミユキさんは何事も起きていないかのように、舞台に出てきたときから抱いていた赤ん坊の人形を撫でている。

（写真２ 「とつとつダンス」より）

あり得ないことを見せつけられた気がした。ぼくだけではなく観客全体に緊迫感が張り詰めている。まだ、砂連尾さんの踊りはとまらない。自分が着ていたヨットパーカーをゆっくり脱ぎ、ミユキさんの頭の上からかぶせる。と、粉雪が降りかかったように、かすかにかぶりを振るミユキさん。

認知症の人とプロダンサーの踊りなどという枠ではとらえきれない不思議な交流が繰り広げられる。砂連尾さんの動きひとつひとつが、ミユキさんに引き寄せられ、彼女の想いをかたどるように線を描き、確かな厚みをつけてただよう。ダンサーが認知症の世界に入っていくのではない。勝手に彼女の内面を代弁しているのではないのだ。彼女の見えない表現に誘われ魅せられて、思わず出してしまったダンサーの身体が、重なる二人のダンスになって観客に見えるようになっただけのこと。

どちらが能動でも受動でもない。生成の現場に二人の身体はあった。そして、ほどけるように、ミユキさんが砂連尾さんから離れていき、倉庫の窓際にふっと佇んだ。その姿に、ぼくは強い衝撃を受けた。単純に感動というには、どこか底深すぎるところから突き上げてくる熱いものがあった。ミユキさんは赤ん坊の人形を静かに静かにあやし続け、窓の外へと目をやっていた。美しい母子像そのものであった。はらはらし通しだったぼくの鼓動が平静な

（写真３ 「とつとつダンス」より）

リズムに戻っているのに気づいたとき、公演の終わりが砂連尾さんの柔らかく響く声で告げられた。

2.3 とつとつダンスを振り返って（森真理子）

2009年11月から2010年3月にかけて、舞鶴市内の特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」で、ダンサー・振付家の砂連尾理さんによる身体を動かすダンスワークショップを行った。最終的に舞鶴赤れんが倉庫（まいづる智恵蔵）での発表を目標に、約4ヶ月間、毎週1回を目安に砂連尾さんとともに老人ホームに通うことになった。

そもそもこの企画が始まった経緯には、私の赤れんが倉庫での活動がある。2009年度に舞鶴市内北吸にある赤れんが倉庫で行う芸術文化活動の提案をする、ということでこの年から舞鶴に住むことになり、「まいづるRB」という名前でさまざまな舞台公演や美術作品、ワークショップなどを企画した。その一連の中で、砂連尾さんのダンス公演を企画することになった。

単に出来上がったダンス作品を上演するのではなく、アーティストに舞鶴に滞在して（または通って）もらい、舞鶴の土地や人と関わりながら作っていく作品を目論んだ。

砂連尾さんを選んだのには、もちろん理由がある。彼の数年間のダンス作品を見たり、話をする中で、幅広い「ダンス」というジャンルにおいて、単に身体を動かしたり、美しさを追求したり、喜怒哀楽の感情表現を行うことではなく、「今の社会において、“ダンス”とはなにか」「同時代を生きる私たちにとって“ダンス”“踊る”とはなにか」ということを常に考えているように思えたし、自覚的にそれを意識して身体と思考に向かっているように思えたからだ。難しい言い方のようにも聞こえるが、自分のしていることに常に批評性を持ち、問い直しをしているアーティスト、とも言える。私が信頼しているアーティストはそのようなアーティストである。

実施のタイミングは、砂連尾さんがちょうど文化庁の在外研修制度で一年間のベルリン滞在を終えた直後ということになった。砂連尾さんが帰国後にどのような作品をつくるか、当時、関係者や周囲からの期待も大きかったように思う。そのため、帰国後一番始めの作品として、舞鶴での創作を依頼した。

砂連尾さんがはじめて舞鶴を訪れたのは2009年10月の下見のときだ。舞鶴を一緒に見て回り、当時、赤れんが倉庫で行っていた美術家・小山田徹さんの「浮遊博物館」を見たり、さまざまな人と会話をした。砂連尾さんからは、「舞鶴の高齢者と作品をつくりたい」という提案がかなり早い段階からあったように思う。

余談になるが、何人ものアーティストと舞鶴を一緒にまわると、特に興味をもつ視点というのがあって、それは面白いぐらいに人ぞれぞれだ。その視点、最初にどのようなポイン

トに興味を持つか、というのは、そのアーティストとの作品創作に重要な影響力を持つことが多い。たとえばあるアーティストは舞鶴の自衛艦や造船所、工場などの「モノ」やその「サイズ感」に興味を持ち、あるアーティストは舞鶴の「地理的/地政学的」なことに興味を持ったり、「歴史」や「都市性/田舎性」に興味を持ったりする。砂連尾さんはそんな中、特に「人」に興味を持つ人だと思った。それも、その人がどのような土地で育って、どんなことを経験した人か、という内面的なことよりも、むしろ「人」そのもの。その人の今現在の佇まいだったり有り様に興味があるように思えた。おおくの「人」の種類との出会いを楽しんでいるように思えた。

そうして、市役所の方から紹介していただいた「グレイスヴィルまいづる」と出会い、高齢者とのワークショップが始まった。

まずはじめに、砂連尾さんの「ダンス」がどういうものかを知ってもらうため、デイサービスで働く職員の皆さんに向けての説明会とダンスワークショップを行った。「ダンス」に対するイメージは人によって千差万別だが、テレビなどでよく見るようなヒップホップやアイドルが踊るようなものでもなく、社交ダンスや民族舞踊でもない、砂連尾さんのダンスの説明にはどうしても時間がかかる。身体をほぐすようなストレッチはまだ効用としても伝わりやすいとしても、たとえば、手と手を合わせるとか、目と目を合わせるとか、ティッシュペーパーを落とさないように相手に渡すとか、それを「ダンス」というには一般的なイメージとギャップがあるのは仕方ないと言える。そこで行われる作業は、その場にいる相手に対してコミュニケーションを図ることである。そのコミュニケーションも単に伝われば良い、というものではなく、「どんなにやっても伝わらないことがある」ことを自覚したり、「思っていたことと違うことが伝わる」ことも含めたコミュニケーションの形だ。他者との距離を測る作業とも言えよう。

デイサービスで何回かワークショップを重ねたが、ちょうど年末の頃に、このやり方では作品発表につながらないのではないか、という話が、砂連尾さんや施設長の淡路さんたちとの間で出るようになった。デイサービスでは、人が入れ替わりやすいし、砂連尾さんも特定の曜日や日付に来ていた訳ではなかったので、毎回、さまざまな複数の利用者の方と身体を動かすだけであった。職員の皆さんも砂連尾さんの滞在を受け入れてくださっていたものの、どちらかというと利用者にも職員にも「砂連尾さんはいつもと違う楽しいことをしてくれる先生」という印象が強かっただろうし、そうなると場の雰囲気も「セラピー」や「レクリエーション」のような意味合いが強まる。そこから作品を引き出すことも出来たかもしれないが、そのときには、それとは違う施設と砂連尾さんとの関係が必要だろうと思った。

そこで、誰からの提案だったか、関係者の間で「入居している利用者の方と固定メンバーでワークショップをしよう」ということになり、2010年の年明けから、オープンな場であ

る一階ロビーで、数名の利用者の方との身体を動かす作業がはじまった。この頃から本格的に何人かのボランティアスタッフを募り、作品発表のためのスタッフも施設に通うようになった。砂連尾さんからの提案で、利用者だけでなく、美術作家でありウクレレ奏者である伊達伸明さん、地元舞鶴の小学生と市外からきている大学生も作品創作に加わることになった。

デイサービスの利用者から入居している利用者になることで、認知症がより進行している方や、より重度の障害を持つ高齢者と出会う可能性が高くなる。そのため、予測不可能なワークショップの内容になったし、毎回が順調なワークショップというわけでもなかったし、ときおり関係者からは不安の声もあった。「これ（週1回のワークショップ）を繰り返して、人に見せられるダンス作品になるのか」「認知症の年寄りが本当に舞台に立てるのか」というのが、その不安の内容だったろうと思う。砂連尾さんは、毎回、参加者たちと会話をして、身体を一緒に動かしているだけなのだ。振付らしいものはないし、何かを強く指示することもない。私自身にも不安がなかったと言えば嘘になるが、一緒にやると決めたアーティストを信じ、なにが出来るか（なにが起るか）分からないことを楽しむ気持ちの方が強かったように思う。何かを性急に決めていくのではなく、ぎりぎりまでアーティストと参加者・スタッフとの関係の変化やそこで生まれてくるものを待つことが、今回の創作ではより重要に思えたし、いつまでも曖昧なままでいることに自信を持ってもらうことが私の役目だろうと思った。

そして公演一週間前には、砂連尾さんもスタッフもグレイスヴィルまいづるに籠りきって、最終作品に向けた調整を進めた。作品発表では、グレイスヴィルまいづるで積み重ねて来た約半年間のワークショップ作業をそのまま舞台にあげるようなイメージを共有した。しつらえこそ、赤れんが倉庫という舞台装置があるものの、内容はワークショップで重ねてきた動きやシーンをつなぎ合わせたものだった。そこから、普段のグレイスヴィルまいづるで流れている時間や人の有り様が、赤れんが倉庫という別の場所で立ち上がってきたのではないかと思う。観客は、その場ではない老人ホームで流れる時間と人と人との関係を共有していたのだろうと思う。

作品への反響は大きかった。「こんな面白い舞台は初めてだ」「本当に丁寧に作られている」「ここまでよくじっくり作品をつくった」「なんだか分からないけど感動した」「とにかく心地よかった」「よくわからなかった」「これがダンスなのか？」「なにが言いたいのか分からない」。観客はある1回の発表の様子を見るにすぎないし、その人がどのような価値基準や尺度を持っているか、ということが反映されるので、当然作品に対する評価や批評はさまざまである。さらに今回の場合、舞台作品に対する評価のあり方と、プロセスや事後の波

及効果も含めたプロジェクト、企画全体に対する評価のあり方の両方を見ることが重要であることも指摘しておきたいと思う。

作品発表だけでなく、それまで老人ホームで起っていたことも重要だったし、それを一度きりの発表で伝えるには不十分な部分もあるだろうと思い、終演後には座談会を企画した。さまざまな立場の人に作品を見て語ってもらおうと、砂連尾さんと施設長の淡路さんのほかに、3名の方をお招きした。ジェスチャーや会話分析などを行う細馬宏通さん、ダンス批評家の古後奈緒子さん、そして、そのあともグレイスヴィルまいづるや「シリーズとつとつ」と大きく関わることになる、看護士であり臨床哲学者の西川勝さんである。

「とつとつダンス」の発表までは、とにかく作品をつくることと参加者や周囲との関係を築くことに必死だったように思う。企画は単年度の助成金に頼るものだったし、一過性で終わることへの責任も感じていたが、私の中では、すぐに今後どうするという案もなく、「とつとつダンス」の発表を終えた。ところが、淡路さんから、発表後も砂連尾さんのダンスワークショップを施設として続けたい、という申し出があった。必死で積み重ねた半年間の作業が、そのように次につながったことは、大きな驚きであったし、とても嬉しかった。さらには、座談会にお越しいただいた西川さんと淡路さんの出会いによって、施設職員向けの哲学の勉強会と、まいづるRBスタッフでもある豊平豪さんの文化人類学カフェという企画も立ち上がった。それが「とつとつダンス」の後、約2年間も毎月1回ずつ続いているというのは、当初予想もしなかったことである。「とつとつダンス」の企画者としては、感謝の意に耐えない。

この「とつとつダンス」発表以降の2年間の活動について、なにかまた舞台発表に近い形でのアウトプットをすべきではないかと思いはじめている。施設職員の方をはじめ、数名の利用者、そして施設の外からの一般参加者による活動は、徐々にその参加者の幅を広げつつある。とはいえ、このことが、施設の活動全体においてどのような位置づけであるのか、日々の生活・活動の中でどのような効果をもたらしているのかなど、まだまだ踏み込めずに見えづらい部分もあると言えよう。

「とつとつダンス」以前と以後で分けて考えてみたときに、外からやってきてさまざまな地域での企画を行う私にとっては、「とつとつダンス」以降、信頼できる地域の場があることの喜びと安心感がもたらされた。なにかことを起こすと、それが当然ながら、なにかの関係性を生み、それが気づけば、思いも寄らなかったあらゆる方向に広がっている。そのような実感を強く得ている。また私がアーティストたちとともに行っている活動が、単に喜怒哀楽を表現したり癒しや感動のための装置でなく、社会規範や既存のものや自明のものを問い直す作業だとすれば、たとえば、老人ホームのような介護の現場と結びつくことで、新しい

可能性を生み出すことができるのではないかと、確信している。

2.4 とつとつ日記（砂連尾理）

・2010年1月10日

グレイスヴィルまいづるの施設長の淡路さんと話す。老人達や淡路さんはダンスワークショップと聞いて、僕が思っている以上に激しく動くことを想像していたのだろうし、欲求もしているのだと感じる。淡路さん曰く、「老人達は砂連尾さんが思っている以上にはるかに動けますよ。」う～ん、確かに。老人だから、こんなには動けないだろうと、最初から決めつけていた自分がどこかしらあったのかと思う。ここはひとつ、激しく動いてみようか。そうやって動くことで彼等の中に、開かれていくこともあるだろうから。

それにしても踊るとは一体どういうことなのだろう？つくづく考えてしまう。

・2010年1月17日

舞鶴には毎週日曜に行っているので、その分休日はなくっているけれども、今の僕にとっては、そこへ向かうことがとても良い時間になっている。今回関わるプロジェクトメンバーが素敵だからというのはあるが、それと同じぐらい、舞鶴の土地が持つ優しく柔らかい雰囲気はとても心地良い。

・2010年1月24日

今日、舞鶴でリハを行う。そうした所、伊藤さんやミユキさんが先週とは全く違う反応で、僕がやろうとしたワークは全くやってもらえず、駄目だった。老人達は、たとえ認知症であっても、僕が思っている以上に周りの状況をきちんと把握しているし、当たり前のことだがその場その場での意志は、はっきりしている。伊藤さんには僕の舞踊観は都会の感覚だろうと指摘され、自分の傲慢さに気づかされた。たかだか今までの経験だけで老人や、その周りの状況を括ってしまおうとしていた自分が本当に情けなくなる。何をやっていたんだ今まで!今思っている以上に、その場やその人に対しての誠意と情熱を持って臨まないと大変な事になるなと痛感する。

そんな中、ひとつの救いはワークの終盤に現れた谷口さんと筆談しながらダンスができたことだ。最後に自分を紹介するダンスを彼女の前で踊ったが、多分、ここに来て一番必死に踊った瞬間だったかもしれない。この気持ちが彼らと接する上での最低限の姿勢かなと思う。

・2010年2月4日

今日、本番当日ウクレレ演奏で参加してもらう美術家の伊達伸明さんと会って話す。彼と話していて確認し合えたことは、今回の公演に於ける我々の立ち位置である。それは通常のパフォーミングアーツが行っている、公演日に全ての準備を合わせて整えるやり方で作品を作っていく方法ではなく、その過程に於いて消去されたものに対する眼差しを告発する事、

そして、そこに重きを置くことへの挑戦かなと思う。ただ、それはもしかすると、つまらない事を延々とやり続ける事を行うという事にもなりかねず、そんなことを観客がみたいものなのか、どうなのかについては今のところ全く確信がない。しかし、そういったことが今の舞台芸術には最も必要なのではないかと、個人的には感じてはいる。

・2010年2月17日

僕が今回、舞鶴でやろうとしている事はダンスという枠を超えて、存在すること、生きるということ、また自分は何者であって、何処に向かおうとしているのかを問う作業であると思っている。ある枠を設定している段階で僕は、実はそれに囚われている訳であり不自由である。ある意味、ダンサーや振付家という名前が僕を縛っているとも言える。そういった事でいうと、健常と障害、老いや認知症という括りからくる世界の分け方も、世界を理解していく上では便利な事だけど、それは同時に不自由さと時に差別を生む。そういった事に縛られる事なく自由に生きることは可能か？そういったことを取っ払って人と向き合って生きていくにはどうしたらいいのか？まあ、そんな事を共に考え、感じられる舞台にしたいのかなと思う。

・2010年2月18日

戸惑う事に対して、どう肯定的にいることができるか？舞鶴での今度のダンスはまさにそこを問う作業でもある。その為、パフォーマーに限らず、観客を含め、戸惑う関係を受け入れ楽しむ環境をどう作っていく事ができるか？本番当日に向け、その辺りが大きな鍵になりそうだ。

・2010年2月27日

“「他者はわからない」という想定を出発点として、他者といることを模索する技法。？「他者はわかるはず」と思うと「いっしょにいられる」領域は限定されるが、「わからない」のが当然と考えるならば、私たちはずっと多くの場合「いっしょにいること」ができるように思う。？（『他者といる技法？コミュニケーションの社会学』奥村隆著）”

“他者と共にいるためには、完全な理解を求めることが適切な理解の仕方ではないことを認める必要がある。そうすれば理解が及ばないために生じる驚きやためらいが、かえってケアの出発点となりうる。？（『ためらいの看護？臨床日誌から』西川勝著）”

今回のダンスのスタンスは、まさにこれだなと思う。

・2010年2月28日

「とつとつ」を焦ったところで、それはただ自分が焦っているだけで、つまりは自分が焦っているという状況がそこにあるだけで、ただそれだけである。

であるならば、どうするか？どうしたいか？この舞台に関しては、しつらえた印象を与えることなく行いたい。演出的段取りをきっちり固めて、老人達や他の出演者が身動き取れなくなるような舞台にする事だけは避けよう。

・2010年3月2日

“あの人の不幸は、私からあの人を遠く運びさる。わたしにできることといえば、そんなあの人を息せき切って追いかけることしかできない。それでいて、あの人を捉えることも、合体することも、ついに望みえないのだ。それくらいなら、少しは身を隔てることにしよう。一定の距離を置くすべを学ぼうではないか。生きよう!他者の死のあとになお生き残る主体がすべて唇にのぼせる語、あの抑圧されし語よ、出現せよ。したがって、わたしはあの人とともに苦しむだろう。ただし、溺れきることなく、自分を見失うこともないのだ。かかる振舞は、非常に情動的であると同時に、非常に醒めたものであり、まことに愛情こまやかであると同時に冷静なものである。(『恋愛のディスクール・断章』ロラン・バルト著)”

ミユキさんといるスタンス、彼女とのダンスは、こんな感じだろうな。

・2010年3月6日

今週1週間は、稽古中、ただただ通しをするという時間を重ねる。不安だらけではあるけど、明日の本番はそんな不安を含めて楽しみたいなと思う。

・2010年3月11日

本番が終わり、今の僕は今回のような認知症の人と一緒にダンスをするといった通常の舞台ルールではやりにくいことを、どう成立させるかということに関心があるのだということが分かった。また、認知症の人と理解し合いたいというよりは、理解し合えないかもしれない関係性に立ち返ること、それを前提にすることが、これからの関係性を考える時に、他者への尊敬とクリエイトし合えるといった、関係に於ける何らかの希望は見出せるのではないかと今回の舞台を通して感じた。

・2010年3月14日

先週舞鶴が終わり、色々と振り返ってみると、グレイスでの作業は本当に楽しかった。また、自分のダンス活動に於いても今回の舞鶴での出来事は大きなターニングポイントになるだろう。自分の手法に於いてもこういうことしか出来ないのだろうし、それに対して開き直れたようにも思う。つまりそれは、僕にとっての踊りとは、あるイメージを動くことで表現することではなく、戸惑い、悩み、躊躇い揺れることで、どう存在し、また同時に関係をクリエイトしあうかにあるのだなということ。そういったことをはっきり自覚する公演だったように思う。

・2012年3月11日

2年ぶりに日記を見返し、振り返ってみた。改めて、その当時の僕はミユキさん等とのとつとつとした対話に戸惑い、悩みながらも、そんな時間を畏れまた楽しむようにして、とつとつダンスは生まれたのだとしみじみと実感する。舞鶴には2010年の4月以降もワークショップを行うため、通い続けている。当初、僕のワークに対して変なことするなと、戸惑いの表情しか見せなかった職員も最近では、その変なことを少しずつではあるが楽しんで取

り組んでいるように感じられるようになってきた。現場の職員が不可解なことに焦らず取り組む“とつとつ化”が進んでいるのは何より嬉しいことだ。また、僕個人のダンスに関しても、2年前のとつとつ以降、植物や昆虫に動物、そしてゴミ、最近ではロボットとも踊ることに何ら躊躇が無くなってきた。むしろ、そんなディス・コミュニケーションから始まるダンスに今はとてもワクワクするようになっている。こんな風になったのも、ミユキさんや谷口さん、そして伊藤さんと関わったことが大きく、彼等と踊った経験が僕のダンスの可能性を拡げたことは間違いない。さて、このとつとつと始まった営みは今後どのように展開していくのだろう。個人的には、2年前もそうだったように、あまりはっきりとした目標地点を設定することなく、とつとつとした関係をこつこつと続けていけたら良いなと、相も変わらずそんな風に今も思っている。

3. 「シリーズとつとつ」への継続・展開

3.1 とつとつダンスワークショップのメモ（砂連尾理）

・2011年5月27日

握手→直接、手で触れ合う。一緒に歩く、歩調を真似る。線香の煙で相手の身体をなぞる。→触れ合わずに2人の空間を意識する。線香の煙を踊らせるように動く、ダンスする。

・2011年6月5日

輪ゴムを人差し指に乗せてじっと眺めてみる。 1人が床に横になって、他の4人が手足をそれぞれ揺らし、力を抜いてみることを体験してみる。手で触ったモノを擬音化してみる。例えば、床、マット、壁、カーテン、風etc。その時、出来るだけ今までにない擬音を作る。自分で探る、独自のオノマトペ。

・2011年7月27日

手相のダンス。手相を振付け譜として捉え、動いてみる。見ている方は動いている人の、それ迄の歴史を感じて言葉にしてみる。1人がポーズをする。見ている方は、そのポーズの物語を作ってみる。その時、出来るだけ日常的でない物語を考えてみる。→身体からイメージ、記憶を読み解く。

・2011年8月31日

手結びストレッチ。→「てむすび」の本に紹介されている、さまざまな手結びを行い、指と頭のストレッチ。参考図書：瀬戸けいた・なおよ（2010）『てむすび』主婦の友社。座って向き合い、お互いの指の動きに合わせて自分の指を動かす。更に、足の指、顔と続けて行う。－自己と他者の関係が揺れ合うところを味わい、楽しむ。横1列になって、目を開けるのと、つむっての両パターンで椅子に座ってからの起立～着席を行いながら気を合わせてみ

る。

・2011年9月30日

足で床を撫でる、掻く、くすぐる、つまむ、叩く、マッサージ等をしながら、足の指や裏側を意識して動かしてみる。 妖怪ダンス→妖怪を動いて説明する。参考図書：水木しげる(2005)「水木しげる　妖怪百物語」小学館。→見えないモノに対する眼差しを意識してみる。

・2011年12月9日

呼吸をゆっくり行い、意識する。3分間で何回呼吸を行っているかを座った時と横になった時で数えてみる。マンボでマッサージ。1人が横になり、もう1人が寝ている人の手足をマラカスに見立てて動かす。スティーブ・ライヒのドラミングの曲に合わせて座っているところから脱力し倒れては起き上がる、を繰り返す。ボレロの曲に合わせ、ロウソクの火と踊る。

・2012年1月30日

ファンヒーターと踊る。→外気が入るところにファンヒーターを設置し、身体をどうやって暖めるかを動いてみる。こっくりさんダンス→1枚の紙に、2人で気を合わせて鉛筆で線を描く。鉛筆ダンス→ドラムの音に合わせて、1枚の大きな紙に複数で線を描き合う。

3.2 文化人類学カフェ（豊平豪）

文化人類学カフェの模様を具体的に紹介する。2012年1月23日に「トリックスター」をテーマに開催された。参加者は20名程度であった。（写真は別の回）

●イントロ

豊平：今回のテーマは「トリックスター」です。皆さんこの言葉はご存知ですか？

新聞社勤務：聞いた事もないな。

食品会社勤務：僕もわかんないっすね。聞いた事もない

豊平：そちらは？

NPO職員：なんとなくこうピエロみたいなイメージがあります。

豊平：なるほど。あなたはトリックスターといえば何を連想します？

建築事務所勤務：僕の勝手なイメージではうちのじいちゃんです

豊平：君のところのおじいさんは確かにおもしろいけど（笑)、どうしておじいさんがトリックスターだと思いましたか。

建築事務所勤務：前に話聞いた時に、他人の話を聞きかずに自分のことを決める。でも、それでもやっぱりウチの会社を大きくしたっていうのが凄いなと。尊敬できる人です。尊敬できる人であると言う事はトリックスターに近いんかなと、僕は思います。

豊平：そちらはどうですか？

（写真４　文化人類学カフェ　）

ホテル勤務：豊穣をもたらす存在。

フリーター：妖精さん。たとえばシェークスピア『夏の夜の夢』のパックとか。

小学校教師：コヨーテとか。

豊平：コヨーテは典型的ですね。動物はトリックスターとしてよく出てくるモチーフですコウモリやウサギもそうですね。パターンとしては大体こんな感じになるようですね。では、もう少しトリックスターとはなんなのか踏み込んでみましょう。まず『トリックスター』（P・ラディン、C・ケレーニイ、C・G・ユング著、皆川宗一郎高橋英夫、河合隼雄訳、1974年、品文社）という本からはじめてみましょう。原著は1956年ですが、日本語訳は1974年です。この本の中で、人類学者のポール・ラディンが、アメリカインディアン、特にウィネバゴ族の神話について触れています。彼らの神話の中にワクジュンカガというキャラクターが出てきます。これをトリックスターとしました。ワクジュンカガは、無理矢理訳すと「手際が良い奴」だそうです。手際がよい奴っていうのは、要はいたずら者です。彼のいたずらの特徴は「無意味」。無意味な事をひたすらする。これは結果として、素晴らしい事を起こす場合もあるし、とんでもなく悲劇的な事を起こす場合もあるんだけど、彼自体には何の悪気もありません。ただやってしまう。そのせいで物事が良い方に向かったり悪い方に向かったりする。そういう目で眺めてみると、どんな神話でもトリックスターは出てくるんです。お、この雪の中を遅れて登場の方がいますね。いきなりですけれど、トリックスターといえばどういうイメージですか。

大学准教授：そんなに中心人物じゃないけども、物語のキーになる存在ですかね。

豊平：確かにキーパーソンです。良いも悪いもなく大変両義的です。ユングはこれを心の一番奥底にある原初的なものであるとしました。だからこそウィネバゴ族の神話っていうのは活き活きとした物語として存在していた。少なくともユングが論文を執筆した当初1956年位にはかつてあった「神話」ではなくて現在の面白話として彼らの日常の中にあったわけです。

森：山口昌男もトリックスターの話をしてますよね。

豊平：『トリックスター』の日本語訳版で山口昌男は「今日のトリックスター論」という解説書いています。この論文はおそらく『道化の民俗学』結びついていきます。さきほどそちらの方がおっしゃられたように、トリックスターといえばピエロを連想するっていうのその意味で間違いではないわけです。例えばイタリアの、オペラに出てくる代表的な道化の1人アルレッキーノは召使いなんです、アルレッキーノっていうのは嘘をつきます。主人から、お前なんでこれやらんかってんって言われて、あ〜○○さんが言ったから、みたいな言い訳をします。○○さんというのはとっさの嘘です。いないんです（笑）。架空の人物まで登場させます。そうこうしている内に、別の主人にも実は仕えている事が明らかになってきます。その主人からも何か怒られて、いやいや、向こうのあのアホが、みたいな事を簡単に言います。とにかく、AとBという主人の間を架空の人物までいれて掻き回すんです。他に、例えば日本だとスサノオノミコトがトリックスターとして有名ですね。

フリーター：スサノオノミコトは、結局、本来不可侵の領域にいきなり殴り込んだり、いろんな事して引っ掻き回します。破壊と再生の象徴のような気がしますね。

豊平：階級とか不可侵の領域とか神聖なものとかいうのを、トリックスター達は軽やかに飛び越えます。あたかもそんな境界など無かったかのように。その秩序の中で生活してた者はびっくりするわけです。えっ？なんで？って、おかしいやん、俺らこういう秩序で生きとったのに、となる。トリックスターに境界を壊す気はないんです。知らないだけなのか、そもそも興味がないのかは解らないですけど、トリックスターは境界を越えます。そこに良いも悪いもないんです。ただそういう存在なのです。このことはとても面白いです。僕らは理性として、ここに線があって、ここからは入っちゃいけないとか、ここは他人の家でちょっと気持ち悪く思うとかっていう、自分で境界を作ります。でもその線は実は想念の中にしか存在しない。僕らが勝手に想定しているだけなんです。特にあたりまえに想定している境界線はあたりまえ過ぎて僕らには見えなくなっています。それをトリックスターたちは眼前に突きつけてきます。

中学校教師：なるほど。

●物語の中のトリックスター

豊平：いろんな物語の中でトリックスターはなんなんだって考えるってのはなかなか面白いと思うんですけど。

建築事務所勤務：「不思議の国のアリス」の猫。チェシャ猫、あれはトリックスターやと思います。

豊平：どんな話だっけ？チェシャ猫は。

建築事務所勤務：チェシャ猫は、アリスっていう女の子が不思議の国に入って来て、そこで最初に会うのが、確かその猫で、猫ってのは何もしないんですよ。ここに行ったらこうかもしれないし、ああかもしれないし、みたいな事しか言わないんですよ。何も断言はしないんですよ。

豊平：なるほど。

建築事務所勤務：導く訳でもないし。でもアリスに出てくるキャラクターの中では一番人気があるんじゃないですかね。猫は喋ってくれるんですけど、会話にならない

豊平：確かに、そうですね。他になんかありますか。トリックスター的なもの。

淡路：『ゲゲゲの鬼太郎』のねずみ男みたいなイメージがちょっとありました。

豊平：ねずみ男は多分そうですね。ねずみ男に主義主張はないです。鬼太郎側にいるかと思ったら敵の妖怪側についたりとかして掻き回します。金儲けしたいとはいつもいっていますが、する気があるとは思えない行動をとります（笑）。ゲゲゲの鬼太郎では、ねずみ男が絡んでくる事によって、いつも話はドライブします。

グレイスヴィルまいづる職員（24歳）：ゲゲゲの鬼太郎はなぜか面白くないんです。漫画は好きなんですけど。

豊平：なるほど。『ゲゲゲの鬼太郎』を初めとして水木しげる作品はいわゆる最近のメジャー漫画の「お話」とは最近のものと少し違います。主人公の鬼太郎をはじめとしてキャラクターたちは成長しないし、話も整合性の水準では破綻していることが多い。伏線もあるようでない。でも『鬼太郎』はまだましな方です。「不思議の国のアリス」になると完全に目茶苦茶です。メッセージとしても何をいっているのかわからない。でもそのめちゃくちゃさとは関係なく面白いわけです。その意味で、ユング的に言うと無意識に繋がってる原初的な、むしろ神話の、トリックスター神話に近い形になってるのかもしれません。

グレイヴィルまいづる職員：うーーん。

豊平：あるいは、物語の構造には2つあるといってもいいのかもしれません。1つは表面的な整合性のレベル。映画で考えるんだったら、例えば本筋と全く関係ないようにみえる会話のシーンがある。そしたら当然、この物語に整合性の構造を見ている人達は、いつかその会話のシーンが生きてくるはずだと思うわけです。1回でもこっちにふっ

たんだから、これは物語にとって何かの意味がないといけないというのは、第1の構造的見方です。でも、それに対して1つ深い構造があります。「目新しいものもないし、よくわからないけどおもしろい」という物語のあり方だと思います。一見して意味不明な物語です。トリックスター的な物語、両義性の反復のような形ではないでしょうか。もちろん、これらの2つの構造は相反するものではなくて程度の差こそあれ同時にあるものだと思います。

食品会社勤務：よくわかりませんね。

豊平：表面的な整合性っていうのは、別の言い方をすれば、合理性とか経済性とか科学性のことだと思うんです。でも、物語の推進力というのは整合性だけじゃなくて、良いとか悪いとかなんて解んない両義的なもののなかにあるように思います。

●ふり幅のある答えへ

淡路：老人介護についても表面的な整合性はあるじゃないですか。お年寄りの世話する事は良いことで世の中に対して整合性があって、ボランティア的かつ人権尊重だって感じ。でも、それに携わる人は非常にストレスを抱えている。家族にしたってそうですよね。それで施設に入居みたいな話になったりもしている。誰がどこで世話するのが一番良いのか、そして老人は本当に世話を求めているのかという部分ですね。

豊平：老人ホームに預けるのではなく生まれた育った家で死なせるのが良い事だっていう通念みたいなものがある。でも、それは現実問題として厳しいとか、そういう通念自体の存在がストレスになる。良い事だと暗黙にされている事でいっぱいありますもんね、強固な道徳的な基準みたいなものがないという状況下においても暗黙の道徳的な何かの基準は在る。でも、その基準が移ろうものだというこれまた暗黙の了解もあるからストレスになる。

西川：あのね。年老いた親の世話は家族がするのが当たり前っていう時代にそれなりにみんなやっていたわけです。ちょっと無理でも、分家とかいろいろやって、地域の中で親族やとかでもなんとかやっていけていた時代がある。それが自分たち個人の努力じゃなくって、いきなり国やとか、そういう所からポーンと養老院ができる。そして、年寄りはもうこっちに集めるわって言った時には、おそらくその今までの秩序をこうガラッと変えるようなやっぱりトリックスター的な何かが出てきたのだと思います。僕たちは普通、問題って固定してて、答えが出たらそれで解決すると思っている。でもトリックスターは、悪だと思っていたら善だったりとか変化する。要するに人間の問題解決っていうようなあり事をせせら笑うようなところがある。「問題⇒答え」だけでは、その社会の問題とか人間の問題に実は解決がつかない事を突き付けるような存在。人間の理性をせせら笑う。せせら笑われて何に気付くかって言ったら、人間の

ある意味での限界、自分達が今一生懸命やろうとしている事の限界みたいなものをきちっとこう気付く。だからふり幅のある柔軟性のある対応が出来るようになる。でないと、理性だけだと本当にコンピューター的に入力したら答えは自動的に出てくるという、1つの流れでしか問題は解決できない。全然違った方向で、その幅の中で、モノ考えられるっていう事では、つまり合理的ではないという事は、実は無能になる訳ではなくって、合理から不合理までの、こう幅広い選択肢を、人間は選べるという事です。

豊平：日常的に善でも悪でもないものってのは多分常にあると思うんです。なんて言うのかな。「盗みは悪い事です」が、じゃあ盗みをやったから「その人は悪い人です」とは単純に結びつかないところで、多分僕らは日常的に生きているわけですよね。

西川：トリックスターのことを考えてみれば、基本迷惑かけて、たまにありがとうという感じでしょう。そういう風に対処しないとトリックスターはすぐに殺されてしまいますから（笑）。盗みをしても、たまにその盗みがよきことにつながって感謝されて許されちゃう。

豊平：憎めない奴。

西川：トリックスターが1人で活躍してる間は別になんともない。ただその周りの人間が、それで何に気付くかという話です。それしかない。だから、盗みをやる奴がいるとして、でもそれと対立しちゃうと怒るだけになってしまう。それは盗られる前と、盗られて怒るっていうのは人間的に全然変わってない。ところが、あ、盗る奴もいるわ、って、こんなうまい事言う奴もいるわ、っていう形で、今までみたいに善人とは付き合うけど、悪人は徹底的にしてやっつけるっていうような生き方から、善人とはちゃんと付き合う、でも悪人とも付き合えるっていう風にこう「幅」が出来る。

豊平：その「幅」みたいな事なんかもしれないですね。トリックスターを使って気付くというのは。

西川：後は「偶然性」も大事ですよね。鷲田清一がよく引き合いに出す話があります。昼間眠くて仕方がない看護婦が、ものも言えないおじいさんの所に行って、おじいさんの上で居眠りしてしまう。その内にそのおじいさんが目を覚ましますが、その娘が婦長とかに怒られないように周りに気遣うようになったっていう話です。あれだって、いわゆる看護婦としてはしてはいけない事をするんだけど、それが、かえっておじいちゃんの、どうしようもない看護婦をかばうが為に、もの凄く自発的な動きが出てきたっていうイメージで語られます。1つの出来事があってでもその出来事を偶然だから無意味っていう風にしてはいけない。あらかじめ計画していた事だけに意味があって、その中でも、成就したものだけが我々にとっての誇りとできるものってしてしまうと人間の人生って痩せっぽっちなものになってしまう。だから、そういうたまたま

の出来事の意味を、こうやっぱ神話的にって言うんかな、あの、認めていくっていう事が、社会の中でも人生についても凄い大事な事っていうのはあるでしょうね。

●ケアプラン

淡路：長寿は、ええ事なんか悪い事なんか。仕事しながら凄く悩みますね。

豊平：はい。

淡路：良い事やと思てるやん。最初は。

西川：そうそう。

淡路：ケアプラン。施設の中でどういうケアをしていくかって言うた時に、その人らしさ、みたいなんを、絶対出さなアカンみたいなプランを、書くんよな、あれ。

西川：でも、認知症の、って言ったら悪いですけど、そういう今までとまたちょっと様子が変わった人のその人らしさっていうのは。

淡路：そやからな、今までの生活歴とかどんな人やったぁとか、本来のこの人らしさはね、みたいなとこに、辿り着く最初のケアプランっていうのは、初めて書いた時はもの凄い良いお母さんで、子供が好きで、とかも、一生懸命やろうとしてきて、家庭生活をもう一回繰り返すような、こうなんか、例えば家事の手伝いが出来るようなこうケアプランをやったげようとかいうような事を、最初は、一生懸命考えるけど、そんな成る訳ないねん。ほんで、成る訳ないとこで、それでちょっと成就すると、今の、この人にとって何が幸せなん？っていうとこに、次、第2段階みたいに。

豊平：でもそれ、一回、その第1段階を踏むのが大事なんですか？

淡路：大体そこ、素人がそこ、まず踏むねん。

豊平：ああ。

淡路：この人らしさぁみたいな、前のお母さんのその生きがいみたいなんをもう一回取り戻してあげようみたいなとこに、最初こうもっていきたい。

豊平：その人が何か好きだったら、その好きなものをもう一回好きになれるように。

淡路：そうそう。好きなものを食べさしてあげよかみたいな。

西川：まあそれはね、大体そういう人と付き合ってた、周りのもんの都合なんですよ。

淡路：そうそう。

西川：しっかりしてたお母さんとはちゃんと上手くやっていけてた家族は、もういっぺんちゃんとしたお母さんになって欲しいん。でないと、困るから。周りの人間が。

豊平：ちゃんとしたくないかもしれないもんね、お母さん。

淡路：そうそう。

豊平：もういいやって。

西川：だから、それは家族の為というか、その人以外の、その人で困ってる人達のケアプラ

ンですね。

淡路：そうそう。だってケアプランて、本人の意見言う人ほとんどないからね。一応本人の意見が主にならないといけないけど、結局最終的に家族の意見とか、こう思ってんちゃうっていう事を、想像して書いていくねんけど、大体打ち砕かれんねん現場では。そんなん全然そんな通りにならへん訳よ、どんな事したって。そうするとある時こう、ミユキさんみたいに、ダンスしてると、この人こういう事で凄い幸せそうやなぁっていう事で見ると、そこで、あ、ミユキさんの幸せはなんやろか？みたいな、今のミユキさんの幸せとか、今のミユキさんから発せられるコミュニケーションを受けとめて、こうプランを考えていこうと、でもプランて言うても、意図した通りにはいかないからね

フリーター：逆にプランていうのは意図的にしてしまうと、それは多分制御になってしまうんではないかなあ。

淡路：でもそれは介護保険の中ではプランやねん。計画を立てろと。人の世話をする為に。

豊平：でもね、計画ってのは打ち砕かれるものですからね。

淡路：で、打ち砕かれたら3カ月毎にモニタリングしろって言われる。結局は、最後のダメが多い。ダメダメって手を変え品を変えやる訳よ。

豊平：でも、どうなんですか、あのこれ完全に興味本位ですけど。中には、どうしようもなく憎たらしいっていうおじいさんとかおばあさんとか…。

淡路：うわぁ～、そんなんここで言ったら怒られますよ。

豊平：でも逆に言うと、同じような事をしてるのに、うわぁ～って言う人がいて、でも憎めないってパターンもある訳ですよね。

淡路：基本的にはみんな憎めない。全然誰もそんな悪意もって誰もやってないから、それこそトリックスターじゃないけど、もう奇想天外。思ってもみない反応があるから、へぇ～ってなって、なんでああいう風な反応なのかなぁっていつも思いますね。

●トリックスターの力

豊平：外国に行くと、僕はフィジーの村で調査をしていましたが、僕はその村の事を何もしらない訳ですよ。言葉も知らないし、習慣も知らないし。まあ、ある程度は本で勉強はして行きましたけど、そんなの知ってるうちに入らない。やってはいけない事を簡単にやってしまう。本来はここには入っちゃいけない所に入って「これなんですかぁ」とか言うし、食べてはいけないものを僕が食べたり、みたいなことがあるわけですよね。だからその、外側にいるっていうのはね、なんかそういうトリックスター的な要素もあります。

淡路：ストレンジャー。

豊平：そうですね。ストレンジャー。

西川：中心と周縁っていう言い方があるけど、周縁なんですよね。

豊平：でも、その周縁みたいなものが、グローバル化が進みインターネットが繋がり…ってなった時に、周縁どこやねん？みたいな話になってんのかなって気が今しました。つまり、この広がっていく、まあ経済性とか合理性とかで代表されるようなこの感覚ってものを相対化できるような、もう一回見直す事ができるような部外者的視点、みたいなものがなかなか見えにくくなっているのかもしれません。実は日常生活で部外者的視点でいくらでも対処してるし、実践の中で生きているんだけれども、それを経済性・合理性の論理にぶつけるような論理として鍛えてはいないから見えにくくなっている。ある村が「村」でいる為には常によそからの人が必要だったし、変な人が必要だった訳ですよ、変なおじさんも必要だったし変なおばさんも必要なわけです。でもそういうのが無くなって無味乾燥というか、綺麗なものとして、おかしな人は病院へ、おじいちゃんは老人ホームへ、ここは全うな人達のコミュニティーみたいな分け方がされていった。

中学校教師：例えば、僕は特別支援教室で教えてるんですけど、子供らの話には整合性がなく、教えても学力つかないし、手も不器用だし、コミュニケーション能力が低いし、多分周縁の子ども達でしたね。

西川：でも基本コミュニケーション能力とかってね、人が身につけるべき能力だと思われてる。でも例えば、大阪大学で、コミュニケーションデザイン科目を教える際に、学生たちに「君達できるだけこの授業の中で自由にやってくれたまえ」といっても何もできない。絶対にこう自発的にと言っても、きちっと良い子でしかいられない。

西川：うん。半年かけても難しいの。

豊平：半年くらいだったら全然ダメだって事なんですね

西川：全然変わらない。理屈は言うんですよ。言ったらみんなその通り言うんですよ。オウム返しだけじゃなくて、パラフレーズして、こういう事ですねって、この授業の価値はこういう事ですねって。だから、喧嘩せえやいっぺん、とかって思うんやけど、罵ったりとか絶対しない。やっぱり基本的なディベートなり、対話の形になんとか納めていこうという。こう、なんか、教員が言わないのに、言わない事を教員の意図というか、授業の目的というか、勝手に先取りして、あまり他の人から文句言われないようにする。だからトリックスター的なとこ全然ないんですよ。良い事しかできない。

ホテル勤務：今の若い子ってすごく協調性を求めますよね。

フリーター：やっぱりね、1つはどっちかですよね。あのう、凄くそこから外れる事がこわいのか。

ホテル勤務：嫌われる事がこわい、っていう事も、なんて言うんだろう、自分の中には抱え込んでて。

西川：そうそう。だからそういう意味ではもの凄い病理性持ってるんですよ。できる人達は。例えばその講義で「ディスコミュニケーション」というテーマで話をしますけれど、そん時に理解できない、解らない、知らない、納得できない。ここら辺にそもそもディスコミュニケーション起きますよね。でももう1つ、歪んだコミュニケーションていうのがあって、例えば教員が、教室っていう側で、さあみんな自分の事を家電製品で喩えて自己紹介しなさい、って言ったら、みんな真面目にすんだよ。ほいで、真面目にしない学校も多分あると思う。多分、しないと思います、特別支援学級の子供達にね、自分の事を電化製品で自己紹介しなさいって言ったって、「わからねえよー!」とか「嫌!」とか、必ずそういう風に、教員の言ってる事をひっくり返すような発言をしたり、気にくわんかったら出て行ったりするかもしんない。で、そういう意味では、授業の内容そのものを大きく変えるくらいの力を持って、教員と同じ位の力を持って、教室の場に登場できるんですよ。ところが、出来の良い人達は、別に、これせえへんかったら単位やらへんぞとかね、別に脅しをかけてる訳でもないのに、教員の規範を自分のそっくりそのままにして、自分が無理じいされているという自覚すらない。自分が今、不自由なコミュニケーションに巻き込まれてて、他の可能性を失ってるっていう自覚もない。だから、あのう、そういう意味ではね、誰も気づいていない社会の変さ加減を、ポンッとこう気付かすっていうのがトリックスターなんですよ。

豊平：トリックスターの行動によって、また周りが気付くっていうのはそうですね。

西川：うん。でもそれは、そういう変なままとはいえ安定してる社会にとっては非常に危険な訳ですよね。

豊平：危険ですね。だから、トリックスター的っていうと、それこそフィジーで、何度も言ってますけど、フィジーの超自然的な力として「マナ」っていうのがあって、マナっていうのは、良いものでも悪いものでもなくて、ただ力ですよね。良い事もするし悪い事もするし、ただの力です。で、それを持ってる、マナが強ければ強い程、首長になれる訳ですよ。で、その強い首長ってのはよそから来る訳です、外来王、外来から来る。で、フィジーを最初に統一した王様はザコンバウっていいます。バウの悪っていう意味なんです。それが王様になる訳です。なぜなれるかといえば「怖い」からです。「理解不能」だからです。怖い部分がある反面、もしかした豊穣ももたらしてくれるだろうというわけです。彼が豊穣をもたらさなかった時は排斥されてしまう。そういう両義的な力があるとされてる。

西川：例えば人工だとか人為だとかっていう言葉の反対語って言ったら自然と思うじゃない

ですか。人工の反対は自然と言う。でもこれは、要するに近代以降の考え方で、人間と自然との間に線を引いたわけですけど、多分トリックスターだとか、そういうフィジーなんかの世界観ていうのは、その人間の反対は？って言った時は超自然なんだよね。だから、あのう、世界観としては昔の方がもっと広い訳ですよ。人間を含む自然と、それを超える超自然っていうもの。でも今僕達は、超自然だとか、そういう非合理なものは、世界観から排除して、人間が理解できる範囲内での、自然と人間っていう、ここでこう二項対立を作っている訳で、世界観としてはもの凄いもっとギュウっと、人間にしか見えない、世界がちいさくなってしまっている。

●おわりに

豊平：ここまで話してきましたが、とはいえトリックスターだらけだったら、これは困った事になりますね。というより、そうなるとそれはもはやトリックスターではない、

西川：そうそう。秩序の傍にいるからトリックスターになれる。

ホテル勤務：秩序があって、トリックスターがいるから、そこで新たなこう、気付いたりが起こると。

豊平：多分、だからさっきも言いましたけど「泥棒」が傍にいるみたいなことだと思います。「アイツいっつもライター盗ってる」とかはよくある話です。トリックスター的な本当にいたらおかしな事になるけど、日常にも、気付きさえすればトリックスター的な両義性の要素はあります。ユング的にみれば、自分の中にこそトリックスターは存在する。だからそれににもう一回目を向けて、その価値を考えてみるっていうのが大事なのかもしれません。まとまった雰囲気が出たので誰かが話し出す前に一回やめましょう（笑）。

3.3 とつとつ勉強会（西川勝）

3.3.1 何のために勉強会は始まったのか

「とつとつダンス」の公演後も、砂連尾さんのダンスワークショップが続いていることを知ったぼくは、「グレィスヴィルまいづる」の施設長である淡路由紀子さんにお願いして、それに加わることにした。月に1回、定期的に開かれているワークショップは、施設職員の研究会という位置づけとともに、地域の住民にも開かれた活動になっていた。入所している高齢者も参加している。簡単なストレッチ体操からはじまり、いろんな工夫で身体コミュニケーションのあり方を探るワークショップは、障がいの有無や立場の違い、年齢や身体能力の差を軽々と超えて参加者みんなが楽しみながらも、不思議な経験をしてしまう内容であった。ただ、その経験をうまく言葉で伝えられないもどかしさを淡路さんは感じていた。施設介護は24時間休みなく行われる。せっかくのワークショップも参加できない人にとっては、

（写真５ 「とつとつ勉強会」）

何をしているか、何のためにしているかがわからない。研修の意味や成果を伝えるためには、それに見合った言葉が必要になってくる。

この悩みに対して、ぼくは「ケアの記録からケアの記述へ」という勉強会をダンスワークショップと並行して行うことを提案した。実際の介護現場で要求されるのは、介護実践の客観的な記録であり、介護者が感じた言葉になりきらない気持ちや戸惑いは消去されてしまう。ある時、ある場面で、自分にだけ向けられた利用者の言葉や表情に自分がどのように揺さぶられて感動したのか。それを共に働く仲間や、利用者の家族に伝えたいのに、うまく言葉が見つからない。書き上がった介護記録は間違ってはいないけれども、大切なことが零れてしまっている。同じ不満が、ダンスワークショップの参加者にも当てはまると考えたからだ。「自分にだけ書けることを誰にでもわかるように書く」「ありのままを伝えたい」ということを目標にして、「ケアの記述」を身につけていくための勉強会をすればよいのではないか。簡単にいくことではないが、不思議なダンスワークショップと同じ日に、それと関連したケアの記述の勉強会をする。この提案は受けいれられた。ここでは、その詳細を伝える余裕はないが、勉強会のタイトルだけを紹介してみる。「レトリックについて」「からだ言葉」「オノマトペ」「遊びについて」「書くこと（1）～（4）」「貝原益軒」など。この勉強会にも施設職員だけでなく、一般の人たちが参加している。

3.3.2　第１回とつとつ勉強会 「介護は感情労働 !?」（2010 年 12 月 10 日実施）

どんなふうに勉強会が行われているのかを伝えるために、第1回目の勉強会の模様を具体

的に紹介する。

はじめまして。大阪から来ました西川と申します。今日は呼んでいただいてありがとうございます。さて、今日は感情労働の話をしようと思います。介護・看護——いわゆるケアの仕事——が感情労働と言われだしたのはすいぶん前のことです。とはいえ、そのことの意味というのがみんなに伝わっていないと思いますし、そして何より学問畑から言われっぱなしというのもどうかなと思っているわけです。だから、感情労働という言葉について介護の現場の人間が考え直してみたらどうか。そういう気持ちでタイトルを「介護は感情労働!?」にしてみました。

お渡ししている「考える本のはなし2」（Neonatal Care. vol.15-2.pp82-83.2002）というプリントは、メディカ出版から発行されているNeonatal Careという新生児医療などを対象にした医療雑誌に僕が連載していたものです。そこで僕は本を読んでその感想を書くコラムをやっていました。そして、これが僕の感情労働について書いた文章の最初のものです。

まず、僕のプロフィールをみてもらいましょうか。「1957年生まれ。看護師。介護老人保健施設ニューライフガラシアに勤務。現在、社会人として大阪大学大学院文学研究科（臨床哲学研究室）博士前期2年に在学中。『ためらいの看護』が修士論文のテーマ」って書いてありますけど、これ嘘です（笑）。このテーマでは修士論文は書きませんでした。「『ためらいの看護』（2007、岩波書店）は、この後、僕が出版した本のタイトルになりました。

「精神科看護、血液透析看護、痴呆老人介護の経験から、『看護の語り』をめざしている。本とお酒と、語り合える友がいれば上機嫌」とプロフィールは続きます。というわけで、今日も本当ならお酒でも飲みながらお話できればいいんですが、そういうわけにもいかないんで（笑）、ちょっとお勉強、いやお勉強というよりはみんなでいろいろと考えてみましょう。

●労働って何やねん？

まず、はじめに、この勉強会があるまで「感情労働」という言葉をきいたことなかった方、手をあげてもらえます？なるほど、ほとんどの方がご存じないですね。肉体労働はどうでしょう？これはもちろんありますね。頭脳労働はどうです？それももちろんありますね。これまでなかったということは、感情労働は肉体労働とも頭脳労働とも違う新しいタイプの労働として言われだしたということなんです。それと、労働という言葉はちょっとかたいですねえ。みなさんは労働で何をイメージしますか？はい、そちらから次々どうぞ（笑）。重労働。労働基準法。労働組合。労働者。どんどん出ますね。

重労働って言葉でもわかるように、労働にはしんどいというイメージがあります。労働のことを英語ではレイバー（labor）といいます。どちらかといえば苦役です。苦しい役割。

だから労働者としての権利を回復しなければならないと言った感じで使われることが多いです。一方で「仕事」という言葉を考えてみましょう。仕事組合って言葉ないですよね。重仕事もきいたことがない。仕事というのは労働とは少し意味が違うようです。「それは私の仕事ですから」という言い方はありますね。このとき苦役のイメージはない。誇りをもっているように思えますね。「それは私の仕事です」と言ったとき、そこにはプライドと結びつくような印象があります。

似た言葉で「仕合せ」という言葉があります。普通の「幸せ」はハッピー、ラッキーということですよね。こちらの「仕合せ」は、自分がすることを人ときちっと合わせる、調整する、みんながうまくいくという意味の言葉なんです。人との関係をうまくするということですが、昔はこちらの「仕合せ」という文字を使っていました。でも、最近はこちらのラッキー、幸運という意味の「幸せ」が使われます。でも、これは単に運がよかったということですよね。「しあわせ」の概念から、人との関係を深く配慮するということが抜けているんです。自分がハッピーだったらいい、自分だけがラッキーだったらいい、という感じになってきている。もともとの日本人の「しあわせ」観の中には「仕」という字が入っていて、それが「仕事」ということに結びついていました。働くことに関して、「労働」を使うときと「仕事」を使うときでずいぶんイメージが違うということを、皆さんにまず理解してほしいと思います。

感情労働というのは、もちろん「労働」の方を使っていますから、どちらかというと批判的なんです。労働組合とか労働運動というとき、どんなことがいわれたでしょうか？工場で一生懸命働く。でも、自分が作ったものが自分のものにはならない。給料もらって働いているわけです。つまり、賃労働です。賃労働というのは、資本家から労働者へお金が支払われる形ですね。

昔はどのようにしていたのでしょうか？賃労働でなかった時代は、魚を獲りにいくと、獲れた魚は自分のものでした。畑を耕すと、作物は自分のものです。家を建てるとそこに住んでいい。働くことはそもそも自分のために、自分の家族のためにする。働くことと自分とか離れていない。働くことが自分のしあわせと直結していたわけです。

ところが、近代資本主義になってから賃金が支払われるようになります。働いて得た何かと労働者が分離されてしまうわけです。自動車を考えてみてください。自動車を全部1人の人が作るわけじゃないですよね。何年自動車会社に勤めたとしても、1台の自動車そのものを作る能力は身につかない。昔の人は一からはじめるから、自分の労働が自分の技術になり、自分の元に返ってくるわけです。でも、「労働」といわれたとき、成果はすべて資本家、雇い主にとられてしまう。返ってくるのはお金だけです。お金のために働くようになった社会ですね。そこで働くことと働いている人が分離されてしまうことになりました。これを

「労働の自己疎外」といいます。疎外というのは仲間はずれにされているということです。自己疎外というのは、自分が一生懸命働いても、働いた成果が自分のものにはならないということを指しています。「これはおかしい」ということで、共産主義の運動だとか、労働運動といったことが登場してくることになります。今は「給料をあげろ」っていいます。もちろん、給料をあげたところで作ったものが自分のものになるわけではありませんが、現在のようにお金がすべてを支配している社会では簡単に自給自足には戻れませんので、こういう言い方になるわけです。ともあれ、「労働」という言葉が登場してきたとき、実はこういう考えが背後にあったわけです。

ですから、感情労働という言葉を使うときも背景にこういった批判があります。そもそも感情というのは、うれしかったり、悲しかったり、と人生のなかで湧き上がってくるもので、それが自分を豊かにしてくれる。でも、その感情が自分のために使われなくなっているのではないかという批判がひとつにはあるわけです。

先に述べたとおり、「労働」と「仕事」は違います。人々が「労働」という言葉を使うときには、苦しいこと――自分との関係がギスギスしてきた――を指しています。そのように使われてきました。介護を、「労働」と思うのか、「労働」という言葉では言い切ることはできないものと思うのか。僕はそこらへんも考えてもらいたいのです。そういう形で考えないと、感情労働といわれたときにおかしなことになってしまいます。

評論家の長崎浩さんという方が「介護労働覚書」(『Bricolage』2010年11月号pp11-23)のなかで、「介護は社会的労働だ」とおっしゃっておられます。介護が賃金をもらってはたらく専門職である以上労働であるといわざるを得ないが、それは社会が必要とする社会的労働なんだと。でも、どんな形であれ労働という言い方をしてしまえば、常に「仕事」の部分は切り捨てられてしまう。だから、皆さんの日々の介護を「労働」だけで語るのではなく、そうでない「仕事」の部分、たとえば良い「仕事」がしたいと思うのかという部分についても考えておいた方がよいと思います。

●感情労働って何やねん？

というわけで、あらためて感情労働について考えてみましょう。肉体労働は、肉体の労働。重い物をあっちからこっちへ運ぶとか、トンカチを使うとか。筋力を使って行う労働ですね。頭脳労働は、書類作ったり、計算したり、頭がいい人しかできない労働ですね。なので、感情労働は心を使います。一番わかりやすいのは、マクドナルドのスマイル0円です。だいたい物を買うと、にっこり笑って「ありがとうございました」っていってくれる。日本では当たり前ですが、中国とか旧ソ連とか社会主義の国では全然笑いません。にこりともしない。金もらって、物渡して終わりです。だって笑顔は別に必要ない。物を売っているだけ

で、サービスを売っているわけではない。でも、マクドナルドだったら、笑顔も商品なわけです。客を気持ちよくするためにですね。気持ちよくさせれば、次回も店にきてくれます。資本主義社会、自由主義社会は、競争社会ですからお客さんにたくさん来てもらうためにそうする。顧客の気持ちをつかむために笑顔をつくる。そしてそのことに関しては「我々はお代はいらない」といっている。でもそのために、従業員はうれしくなくても笑わなければならないわけです。

従業員のなかには、「今日亭主と喧嘩してきたし、財布は落とすし、ほんとおもしろないわ」という人もいるかもしれません。かといって、客がきたら、にっこり笑わなければいけない。ということは、自分の笑顔と素直な気持ちが分離することになります。労働で作ったものと労働者が切り離されているような形で、感情が疎外されている。このような批判がまずあったわけです。そして、このような感情労働を強いられるのが、顧客と顔を合わす対人サービスです。そのことを最初に言いはじめたのが、僕が「考える本のはなし2」の中で取り上げたホックシールドの『管理される心』（A.R.ホックシールド著 石川准・室伏亜希訳 世界思想社、2000.）です。

ちょっと横道にそれますが、神戸のファッション美術館に行ったときのことです。美術館にいくと、お土産がおいてありますよね。この美術館の場合は、りかちゃん人形がいろんな服を着たポストカードがたくさん販売されています。それをじぃっと見ていると——みている僕も僕ですが（笑）——、そのなかに2人組のりかちゃん人形がナースとスチュワーデスの格好をしているカードがありました。ちょうど『管理される心』を読んでいたときだったので、これが非常に印象に残りました。

というのも、ホックシールドの本のなかで、まず話題にされているのが、スチュワーデス（客室乗務員）なんです。日本の航空会社のスチュワーデスさんでにこにこしてない人いますか？感じ悪い人いますか？いないですよね。すごくやさしい良い感じの人ばかりです。でも、あの人たちがみんな良い人なのかといえばそんなことないでしょう。仕事だからですね。酔っ払い客に「おいっ」って言われて、「誰が『おい』やねん」と言い返すスチュワーデスはいません。笑顔で対応しなければならないわけです。僕は昔レストランで働いていたことありますが、客の1人に「おい」って言われて、「700円くらいでおいっていわれてたまるかい」って言い返して、3日で首になったことがあります。感情労働できなかった（笑）。

それはともかく、この笑顔は演技なんです。演技にも「表層演技」と「深層演技」があります。要するに、上っ面の演技と深いところからの演技ということです。上っ面の演技をやりなさいといわれたら、給料高いからしょうがないなあ、と思えるかもしれません。たとえば、水商売は、にっこり笑う分給料が高い。めちゃくちゃ高い（笑）。それは笑顔でいい気持ちにさせてくれるからです。このとき、「この笑顔はうわべだから」と理屈では思えるか

もしれない。でも、「ひょっとしてオレに気があるんじゃないか、今度また来よう」と思わせるくらいの演技力の店じゃないとはやらない。だから店側は、「うわべだけの笑顔じゃ駄目だよ。心からの笑顔をみせなさい」と教育する。

さて、飛行機のスチュワーデスは、元々看護婦でした。空なんか飛んだこともなかった人間にとって飛行機は恐ろしいものです。体調も悪くなります。それに適切に対処できる人間としてナースが選ばれた。人をケアする職業として一番古いのは売春婦なのかもしれませんが、近代以降で考えると助産婦、看護婦でしょう。

スチュワーデス兼看護師は客にどのように対処するのでしょうか？たとえば、酒を飲んでごねている人がいるとします。それをみたときに彼女らは「この人は本当は怖いはずだ。その怖さを酒でまぎらわしている。だから子供みたいに駄々をこねているんだ」と思うわけです。だから「私はわかっている。だからやさしくしてあげる。だって、私は怖がっている人を助けてあげる役なんだから」となる。「しんどい」っていう人に、「うるさい」っていう看護師はいません。「あーしんどいですか」とわかってあげる。そういう教育を徹底的に受けてきているわけです。「この人はお酒で恐怖を紛らわしている。私を母のように思って甘えている」という理屈をひとつ入れることによって、しばらく恐怖を受け止めて安心させてあげることがその人に対する一番のケアになると読むわけです。それで心からやさしくする。これが深層演技です。

●感情に規則があるんかい？

看護や介護に携わる人はそういう教育を受けています。「上っ面でやさしくしてあげる」のでは駄目なのです。「痛い、痛い」と訴えている人に、「早く死ねばいいのに」とはいえません。そんなことを思ってはいけないということになっている。要するにケアする相手に対してマイナスの感情を持ってはいけないわけです。こういうのを「感情規則」といいます。

看護・介護に限った話ではありません。職場に来て上司に挨拶するときに、仮に上司のチャックが開いていたとしても大笑いしてはいけないですよね。仕事に来たらまじめな顔をしなくてはいけない。葬式に行ったときでも同じです。まじめな顔をする。これらも感情規則です。人との関係をうまくやるために生み出してきた文化なんです。だから、感情のコントロールは日常生活の中でも行われています。それは人との関係を円滑にするために、育ってきた社会において小さいときから身についたものです。もっと身近な話をすれば、入った学校や会社において身についていくことです。

でも、労働といったときには違います。そこには賃金があります。賃金のために感情のコントロールをすることになります。思い込んでしまえる人間はいいです。演技していることも忘れてそれ自体が理念になる。そうやれたらいいですが、どうしても我慢できない人はど

うなるか。そういう人は「私にはケアをする資格のない人間だ」と自分を責めるんです。そう教育されているのですから、それができなかったときに「悪いのは私だ」となってしまう。悪くないんですけどね。でも、そうなってしまいがちです。

たとえば、認知症の患者にぼろくそにいわれる。物を投げられる。ぬれているオムツを替えようとしてたたかれる。腹が立つ。でも「この人は認知症だ。怒ってはいけない」と必死に思うわけです。そして、悔しくて涙がでる。限界がくる。そうなったら、「私には無理です」となってしまう。自分を責めてしまう。

感情をコントロールするより、きちんとオムツを替えてあげた方がいいのではないかというところにはなかなかいけない。徹底的に深層演技までするように教育されていますから。でも、この感情のコントロールは賃金に含まれていません。感情は無料だと思われているわけです。感情のコントロールも労働の内だっていったところで、感情には対価は払われません。社会学者ホックシールドが指摘したのはまさにこのことです。こういう形で労働者に対する搾取がはじまっていると述べたわけです。

●介護は感情労働かいな？

看護・介護がしんどいのはそういうことかぁって思いませんか？だから、はやったわけです。実は、ホックシールドはもともとスチュワーデスと借金取りについて言及しています。借金取りは、相手が気の毒だなあと思っても、仕事ですから相手に恐怖心を起こさせるために怒ったふりをしなければならない。今お話してきたのとは逆ですね。怒っていないのに怒る。ともかく、彼はいろんなタイプの感情労働があると述べた。そこから様々な研究者が刺激を受けて、たとえば看護学者パム・スミスが『感情労働としての看護』（ゆみる出版、2000）のなかで「看護・介護も感情労働なのではないか」と発表したわけです。

感情労働としての看護・介護というときに言われるのは、「怒っているのに笑顔をつくる」だけではありません。たとえば、担当の患者さんが亡くなる。悲しい。仕事が手につかない。そんなときは先輩に「泣くのは家族、あなたは看護師」と怒られるわけです。次の患者さんのところにいくときには笑顔じゃなければいけないといわれる。悲しいのに笑顔をつくらなくてはならないわけです。

こんな感じで、看護・介護を感情労働として分析するやり方が広がっていきました。日本では、日本赤十字看護大学の教授で精神看護の武井麻子さんが『感情と看護：人とのかかわりを職業とすることの意味』（医学書院、2001）という本を書かれています。僕はこの人にもお会いしたことがありますが、彼女が2006年に出した『ひと相手の仕事はなぜ疲れるのか：感情労働の時代』（大和書房、2006）あたりからちょっとついていけないような気がしています。それは僕が介護という仕事は労働という側面からだけでは語れないと思っている

からです。冒頭でも述べたように、「仕事」の側面があると思っているからです。それからもうひとつ思うことは、肉体労働、社会労働、感情労働とかいう言葉でキレイに分けようとするのは、学者がやりたがっているだけじゃないのかということです。

どんな仕事にだって、すべての労働の側面があります。工事現場の肉体労働者だって、もちろん穴だけを掘っているわけではありません。単純肉体労働というものをするときにどれだけの感情のコントロールが必要か想像に難くありません。頭脳労働だって同じです。体だって感情だって使わないとやっていけません。

わかりやすくするために、論理ですべてを切りわけるのが学問のやり方です。でも、このやり方では実際の現場で働いている人たちを無残に切り捨てているところがあるように僕は思います。だから現場から言い返さなければならない。

ちょっとお勉強して、「ほー、介護は感情労働だったんか」というところで終わっては駄目です。自分たちに対して言われていることに、自分たちが現場で考えている言葉で言い返していく。そのことが大事です。

感情労働は確かに介護のつらさを理屈にはしてくれた。それは確かにあります。でも、それを現場の人間が聞いたからといってどうなるのでしょうか。現在は頭脳労働に価値が置かれているところがありますから、たとえば、肉体労働がつらいから頭脳労働を目指すっていうのと同じように、感情労働がつらいから頭脳労働を目指すということになりかねない。感情労働って名づけられたとたんに、自分の仕事に対して喜びや誇りがもちにくくなります。

●身体（からだ）で考えてみたらどないやねん？

感情労働といわないとすれば、どのように考えればいいのでしょうか？僕は、グレイスヴィルでの砂連尾理さんのワークショップをみて、あらためて労働は頭脳だけでやっているのではなく、筋肉だけでやっているのではなく、「身体（からだ）」でやっているということを思いました。「身体（からだ）」というと「肉体」と混乱しやすいから、これを「身体（しんたい）」と読む人もいます。頭脳でも、肉体でも、感情でもわけられないものです。

西洋から入ってきた学問の一番根本にあるものは「心と体は違う」（心身二元論）ということです。だからこそ、肉体労働と頭脳労働とがわけることができるようになります。でも、「身体」（※以降「身体」を「からだ」と読みましょう‼）というときの「身」は、心だけでもなく肉体だけでもなく、そのどちらも兼ね備えたものです。そういう豊かな意味をもった言葉です。介護では必ず身体と身体が出会います。触れ合うわけです。ちゃんと相手の顔をみて、自分の顔をみせてやらなければならない。そういう身体の関係でやる仕事なんです。僕は肉体ではなく身体という関係について考えてみようと思っているのです。我が身であったり、人の身であったりになってみようというわけです。

そもそも感情とは何か？相手の気持ち、自分の気持ちを考えないで介護はできません。身体や頭脳は寝ればある程度回復するかもしれない。でも気持ちの問題は回復しません。今、鬱の時代といわれていて、年間3万人自殺しています。その理由にはもちろんいろいろありますが、多くの人は感情の処理ができず、他人に対する攻撃性、自分に対する攻撃性をコントロールできなくなっています。

実は感情というものは人から補給するしかありません。自己回復しないのです。アフリカのブッシュマンの研究をされている人類学者の菅原和孝さんが『感情の猿＝人』（弘文堂、2002）の中で、感情を個人の中にあるものと考えたらいけないと述べています。感情は人と人との間でやり取りする、贈与しあうものだというわけです。これを子供の発達心理で考えてみましょう。

赤ちゃんがぐずっているとします。お母さんは「いないいないばあ」とかやったりしますよね。「どうしたんですか？」とはいわないですよね（笑）。要するに表情で感情を表すわけです。では、表情はどうやって身につけるのでしょうか？自分の顔って自分では直接みることができない。にもかかわらず、たとえば自分の笑い顔は他人のそれとそんなに変わらないとおもっていますよね。自分の顔を確かめてもないのに、ちゃんと笑っているつもりでいる。

人は実は確認のしようもない自分の顔をさらけ出して生きているわけです。だから、写真とかに撮られると他人の顔はいつもどおりにみえるのに、自分の顔だけ変にみえたりする。「こんな顔じゃないわぁ」ってな感じになります。鏡でみるときは顔を作っていますから、一番いい顔なわけです（笑）。油断した顔はなかなかみることができません。

表情というのは、母子関係のなかから探ります。お母さんは赤ちゃんがうれしそうだなという時に「あらーうれしいねぇ」とうれしい表情をします。お母さんは赤ちゃんの表情をよりおおげさにして返す。うれしいときにはこんな顔するのよと教えている。子供は母の表情からだんだん学んでいくわけです。お母さんから返された表情が赤ちゃんの顔に住みつくんです。このように、表情、そして感情というものは人から与えられたものなのです。

感情労働論で問題なのは、感情というものが自分の中にしかないという考え方です。確かに心は名刺のようにみせることはできません。心はみえないし、みせることができないというのが当たり前になっています。でも、僕の師匠の鷲田清一さんは「心はみえる」とおっしゃっています。どこにみえるのでしょうか？

●心はみえるもんかいな？

実は心はふるまいや表情の中にみえるのです。先ほどの母子関係のように表情はみえるものとして与えられます。泣いている人をみたら、「なぜ泣いているんだ」とすぐ思う。悲し

い感情を伝えるために、相手が顔の筋肉やら涙腺を使って泣き顔を作っているとは思いません。私たちはふるまいのなかに人の心を読み取っているわけです。自分の心もみせられないと思っていますが、実は自分のふるまいの中に全部出ている。だからこそ礼儀作法というものがあります。ふるまいが形を決めるわけです。それによって、みえないと思われている心が他人と交換できるようになる。これは人間の社会関係なんていう大仰なものではなく、母子関係がある哺乳類の中に普通にみられるものです。人との関係のなかで自分を作り上げていくのであって、自分だけでは自分を作り上げることはできません。感情労働論のなかでも「ほんとうの『私』がなくなる」という言い方をしますが、この「私」は自己完結したものではない。「私」というのは、まだ自分というものがなかったときに母子関係において喜び方、悲しみ方といった心を与えられてできたものです。生まれたときには「私」でも、「私でないもの」でもないんです。様々なものを与えられて、徐々に「私」の個性がでてきて年老いていく。「私」は「私」として生まれて「私」として死ぬわけではないのです。「私」になって、「私」をほどいていくわけです。そういう意味で心はみえるといえます。この「みえる」が私が先ほどいった「身体（からだ）」なのです。

感情を自分の所有物のように扱うのではなく、もう一度自分の身体として認識しなおす。僕たちはなかなかこれができません。僕は今立って話しているときに、立っている足の裏の感覚ってありません。あるけどない。幽霊みたいなものです。たまにイライラして貧乏ゆすりしたりします。そのとき、僕の感情はそのときの足の動きにあります。でもそのことへの自覚はありません。自分の身体を自分でしっかり理解するというのは難しいのです。いくら話し合ってみたとしてもなかなか気づけない。だから砂連尾さんのワークショップみたいに五感をはたらかして、感情だとか介護について考えてみることが極めて大事なんだと思います。

先ほど、介護の現場では必ず身体と身体がふれあうといいましたが、これだっていろいろ考えられます。おそらくまず声をかけるわけですが、声だって身体です。声帯を震わせて空気を振動させて相手の鼓膜を震わせます。指一本触れなくても、身体のふれあいなんです。そういう「身体（からだ）性」にもっともっと敏感になっていったときに、感情労働なんて言葉で表現する以上に、介護がどれだけの可能性を持った世界であるか気づくことになります。もっとも身体と身体とが向き合う仕事のひとつが介護です。そんなすばらしい介護という仕事を感情労働なんて言葉で語らせない気構えで、身体に対する感性を高めて、表現する言葉を身につけるともっともっとおもしろくなってくるのではないでしょうか。というわけで、今日はこの辺にしておきましょう。

4. 笑う舞鶴

4.1 とまどいに向き合う　～その先にあるもの～（淡路由紀子）

4.1.1 初めのとまどい / ダンサーの発するメッセージ

2009年11月7日「踊りに行くぜ!」という公演会に来ませんか、と誘われた。舞鶴にある赤れんが倉庫群の中で、コンテンポラリーダンスの公演があるという。NPO法人赤煉瓦倶楽部舞鶴のメンバーである友人の話を聞きながら「ふーん」「へぇー」と曖昧な返事をしつつ（あんたね、福祉の現場、高齢者介護の現状がわかっていますか？アートとかコンテンポラリーとか、よくは知りませんが、今はね、そんな悠長な話をしていられるご時世じゃないかもね!）と思いつつ、それほど言うならと会場に行ってみた。

1000円という激安の入場料を払って薄暗い赤れんが倉庫に足を踏み入れ、プログラムを読んで分かったことは、〈危険ですので、暗転中は動かないでください。〉という一文だけで、これだからゼンエイゲイジュツには付いていけそうもなく、途中で退屈したらどうしようか考えながら観客席のないガランとした倉庫の端に立っているうちに、パッと明りが消え、それは始まった。

倉庫の闇としじまの中にいるうちに、全身の感覚が鋭くなったような気がした。やがて、ぼんやりと照明が灯りはじめた中に見えたものは、ダンサーではなく、強烈なメッセージを発する何か巨大な塊のようなものだった。メッセージの内容は全く理解できなかったが、そのパワーはとにかく圧倒的で、半ば強制的にコミュニケーションを求められている感じだったので「ちょっと、覗いてやるか。」と呑気に構えていた私は、明らかに不意を突かれ慌てた。

「何だ、この人達は？　これがダンス？　ダンスって何???」ゲイジュツと言ったって岡本太郎みたいに作品を残すわけでもなく有名でもない。要するにアーティストと名乗ってはいるが、自己満足を押しつけているだけじゃないのか、と不意を突かれた悔しさで一瞬、あきれた感で片付けようとしたが、あっという間にそのダンスらしきものに引き込まれてしまった。

何故こんなに一生懸命になれるのか？もしかしたら、今の世の中に必要なのはこういう力なのではないか。目の前で起きていることはいつしか驚きを通り超え、どこかでパッと希望の光が射した様なこれまでにない可能性のようなものを感じ、全てのダンスが終わる頃には、ものすごく興奮している自分に気が付いた。

4.1.2　2つ目のとまどい / アーティストとの出会い、出会いの方法

公演からほどなく、縁あってまいづるRBの森 真理子さん、そしてコンテンポラリーダンサーの砂連尾 理さんを紹介された。「舞鶴の子供やお年寄りと一緒に作品を創り、発表することができないか。」ということで市内を巡り、最後に特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづるに来られた。ジャレオ？それって本名？名前を聞いた時は、いかにもそれっぽい特別の名前だと思ったが、会ってみると礼儀正しい穏やかな普通の人だった。

ところでお年寄りに会いたいと言われても「もしも企画に協力できるような人がおられるとしたら…」と、要支援、要介護1，2という比較的要介護度の軽いご利用者が多い2階フロアにあるデイサービスに案内することにした。

ご利用者がどんな反応かなと思っていたら、背が高くてハンサム、その上好青年の砂連尾さんは思った通りみんなに歓迎され、そのままデイサービスでダンスワークショップがはじまった。

砂連尾さんがどんなワークショップをされるのか気になって毎回見ていたが、デイルームで輪になって集まってくれたお年寄りの中で、砂連尾さんは「レクリエーションの先生」になっていた。デイサービスのスタッフにとって、施設長が突然デイルームに招いたダンサーと自分たちがどういうお付き合いをするべきか考えた末「レクリエーションの専門家」にしてしまうのが一番楽なお付き合いのようだった。

ワークショップが実際どういうものか私もよく知らなかったが、いつもお年寄りの輪の中心にいないといけない砂連尾さんとご利用者の距離はなかなか縮まりそうになく、これはちょっとイメージから外れ出したのではないかと言う気がしていた。

「このままで何か作品ができそうですか？」何度目かのワークショップが終わった時、余計なお世話と思いつつ、ディレクターの森さん、アーティストの砂連尾さんの立場が心配になってきた。ところが森さんは、企画・制作の責任者でありながら、それほど焦っている様子が見えないのが不思議だった。アート系の人は大らかなのか、もしかするといい加減なのか、ますます「この人達、大丈夫かしら。」と心配になったが、あれこれ喋っているうちに、では、次のワークショップは、まだ出会っていない特養のお年寄りに紹介なしで会ってみようか、ということになり、次回は1階フロアでワークショップを試みることになった。

特養は平均介護度4以上、障害高齢者の自立度、認知症高齢者自立度も非常に重度の方が多く、デイサービスのように砂連尾さんが歓迎されるかどうかはわからなかったが、砂連尾さんは、出会ったお年寄りと挨拶を交わした。そして、言葉を交わしながら徐々に、身振り、手振り…ダンスでのコミュニケーションを試み始め、そうしているうちに伊藤さんとミユキさん、そして谷口さんと出会った。

伊藤さんはサービス精神にあふれる男性で、自ら進んで得意の社交ダンスのステップを披

露したりしながら、砂連尾さんと相当親しくなっているように見えた。ミユキさんは砂連尾さんが来るたび「どうしたん？」「あらあら・・。」と、少々困惑しながらも、まるでかわいい孫か息子か、もしかしたら恋人と付き合うように、とても穏やかに砂連尾さんと過ごしていた。谷口さんは、やがて砂連尾さんを先生と呼ぶようになり、私たちが持ち込んだ「ダンスを発表する計画」に一生懸命お付き合いしてくれるようになった。ワークショップは4人で揃って始まることもあれば、砂連尾さんと1対1の時もあり、また、時折別の入居者が加わることもあったが、砂連尾さんと伊藤さん、ミユキさん、谷口さんが出会いを重ねる様子をワークショップと呼んでいいんだな、と思えるようになった。

砂連尾さんが手ごたえを感じ始め、ワークショップも順調に進んでいるように思えたある日のことだった。伊藤さんが自分の目の前で黙ったまま妙な動きを始めた砂連尾さんを見て「アンタ、アンタは何をするために来とるんや!」「何？ダンス？ダンスを教えに来とるんか？それやったら、時間はいつ、これをします!とか、やり方があるだろ!」「アンタのやっていることは、ダンスじゃない!」と激怒したことがあった。

伊藤さんは砂連尾さんが謝るのも、私がとりなすのも聞かずに、くるりと背を向けてスタスタと自分の部屋に帰ってしまった。「今日はどうしたことか、機嫌が悪かったですね。」という私に、砂連尾さんは「身体で伝えようとするあまり、言葉をおろそかにしていました」と反省していた。伊藤さんは、あんなに楽しそうだったのに以後、ワークショップに加わろうとされなくなった。

4.1.3　3つ目のとまどい / とまどいの宝庫「とつとつダンス」

2010年3月7日、とうとうその日が来た。そもそもワークショップはグレイスの中だったので、何の心配もいらなかったが、公演会は全く環境の違う赤れんが倉庫で行われる。リハーサルはまいづるRBのメンバーやグレイスのスタッフなど今では身内とよべるような人だけだったので、いつものワークショップを見ているようだったけれど、本番は当り前だがお客さんが入る。そんな中で普段通りに事が運ぶのだろうか、伊藤さんはあの日までのワークショップの記録、映像での出演になったので心配なかったけれど、もし、谷口さん、ミユキさんが少しでも落ち着かなくなったら、みんなには申し訳ないけれど、公演などキャンセルしてグレイスに戻るつもりだった。

けれど、それは取り越し苦労に終わった。谷口さんとミユキさんは、私が衝撃を受けたあのコンテンポラリーダンサーと同じパフォーマーに変貌されていた。

砂連尾さん、他の出演者とともに舞台にいるお二人も明らかに何かを伝え始めた、いや何かが伝わり始めたという方が正しいのかもしれなかったが、いとも簡単にパフォーマーになってしまったお二人の様子を見て言葉ではうまく言えないが、とにかく胸が熱くなった。

そう言えば、取り越し苦労だったことがもう1つ。公演会が終わり、お二人にいつもの日々が戻ってきた時、「舞台に立つ」と言う自覚はそれぞれ違ったかもしれないけれど、それでも、いつもと違う所で1日を過ごしたことで、お二人が相当疲れているのではないか、もしかしたら、後になってドッと疲れが出て、いわゆる「体調不良」になられるのではないかと心配したが、公演会の翌日も、その翌日も、結局その後ずっと何事もなかったかのように、いつもの谷口さんとミユキさんだった。あんなにオーラを放っていたお二人だったが、どちらも全く消耗されていなかった。

4.1.4　４つ目のとまどい / 理由を説明するのは難しい。

ワークショップから公演会まで1つの事業が無事に終了してホッとしたが、はじめから終りまで「とまどい」だらけで、数々の謎を残したこの数カ月間の出来事をこのままほったらかして去って行かれるのは困ると思い、本当は半分以上、自分のためだったが「お年寄りのために続けてもらえませんか」と砂連尾さんに持ちかけた。

ありがたいことに、砂連尾さんの方もグレイスのお年寄りと「また、会いましょう。」と、あてのない別れをするのは寂しいと感じてくれていたようで、そのままダンスワークショップを続けてもらう話がすぐにまとまった。

2010年6月、砂連尾さんが再び来てくれるようになり、そのうちまいづるRBのスタッフだった文化人類学の研究者である豊平 豪さんが「文化人類学カフェ」を開いてくれることになった。そして「とつとつダンス」のアフタートークのパネリストだった西川 勝先生にも「とつとつ勉強会」を開いていただけることになった。

砂連尾さん、豊平さん、西川先生といろんな人に来てもらえることになったので、せっかくだからお年寄りや職員はもちろん、そのほか誰でも自由に参加してもらえたらいいと思ってはいたが「いったい何のためにやっているのですか？」と聞かれたら「楽しいから」としか言いようがなかった。

本当は目的もあるし、理由もあるのだけれど、モンモンとした状態に変わりはなかったので、例えば職員に「日々の仕事に何か役に立つのですか？」と言われようものなら、かなりあせったと思うが、幸いなるかな、そういう質問はなく、「シリーズとつとつ」と名付けたこのダンスワークショップやカフェ、勉強会を楽しみにしてくれる職員が数名いてくれた。

4.1.5　最後に　特別養護老人ホームというところ

特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづるは2005年4月に開設した。特別養護老人ホームと言うくらいだから、誰にでもわかる高齢者介護のための施設なのだが、名前にあるグレイスヴィルはグレイス村と言う意味で、グレイスには私たちが理想とする特養、例えば優し

い場所、温かい場所、素敵な場所でありたいといった様々な思いを込めており、そこにわざわざ付け加えた「村」には、人の暮らし・営みとともに、人との出会いがある場所でありたい、業界的に言うと「地域に開かれた福祉施設」「地域ケアの拠点施設」みたいな思いを込めていた。いつでも誰でも気軽に来てもらえるように、そう言う思いもあって正面エントランスの看板には、「特別養護老人ホーム」という表示はなく、ただ「グレイスヴィルまいづる」としか記していない。

グレイスは、いつしかお年寄りやご家族だけでなく、地域の子供たちやボランティアさんにもたくさん来ていただける場所になり、思い描いた交流や出会いのある活気あふれる賑やかな「ぐれいす村」としてどんどん楽しくなりそうだった。

けれど、現場では、その盛り上がりとは別に、特養として一定のレベルに達した感が漂いはじめ、それは開設以後のバタバタが落ち着いて来たという見方もできたが、どこかで何かが失われつつあるのではないか、という危なげな感覚が振り払えずにいた。

「踊りに行くぜ!」を見たのは開設からちょうど5年になろうとするそんな頃であり、その頃の私は、介護に関わる人の「感性」はどうやって育まれるのか、どうすれば磨かれるのか、と言う事について、何の手掛かりも得られずかなり行き詰った気分になっていた。

この業界は技術や知識を磨く場所はたくさんあるのだけれど、どうも「感性」を磨く場所が見当たらない。介護の現場で働く人は、そもそも志がある、介護や福祉に情熱を持った特別な人達ばかりなので、そう言う部分は今まで必要とされなかったのかもしれないが、一方で、最近は、そんな熱い人たちの離職に歯止めがかからない、あるいは、介護現場を目指す人が極端に少なくなっているという現実があった。

特養は間違いなく高齢者介護の専門施設だが、乱暴な言い方をすれば、そこで働く私たちは、自身がまだ一度も体験したことのない、しかし、いつかは必ず体験するはずの「老い」と、そして体験するかもしれない「老いにともなう様々な事」例えば「認知症」について、想像をめぐらしながら働いていた。

想像をめぐらすためには、各自の「感性」がとても大切なはずで、それは時に仕事の「やりがい」を大きく左右するにもかかわらず、その大事な部分は、志や思いやりと言った適当な言葉で簡単に片付けられている様な気がしてならなかった。

このまま「感性」が育まれなければ、磨かれなければ、どんなに志を持った人でも、いつか感情労働に陥り、身を擦り減らし、疲れ果て、ヘタをすると現場を去っていくのではないかと思いつつも、「感性」はそもそも持って生まれた資質か才能が影響しており、育むとか磨くとかいうものではないのかもしれず、どうすればいいのか頭の中で堂々巡りするばかり

だった。

そんな時、縁あって「とつとつダンス」が生まれ、「とまどい」に出会い、その後「とつとつダンス」で出会った方々と「シリーズとつとつ」を始めることが出来て「とまどい」について考える機会ができた。初めて会う人、初めての体験は「とまどい」を意識しやすかったのかもしれない。

けれど、よくよく考えてみると、「とつとつダンス」は、紛れもなくこのグレイスでの出来事であり、実は「とまどい」のいくつかは、ずっと目の前にあったはずだった。

そこで、もうちょっとじっくり振り返ってみると、開設したばかりの頃、私も職員も、何事かがある度に、もっといちいち驚いていたし、慌てている感があったような気がしたが、いつの間にか、専門施設、専門職という名前があるがゆえに、そう言う事がだんだん失われていったような、特養の中には「とまどい」など、もともと存在しないかのようにどんどん「とまどい」を遠ざけていたのかもしれなかった。

「とつとつダンス」のおかげで、「とまどい」に再び出会う事ができ、「とつとつシリーズ」によって、「とまどい」は遠ざけるものではなく、むしろ大事にしなければならないものだと思えた。

そして、これから、この「とまどい」に向き合っていくことができたら、もしかすると言葉によらないコミュニケーションがどんな力を持っているのか、そんな事がわかる日が来るかもしれないし、ひょっとするとそれが「感性」を磨く手がかりになるかもしれない。

いつか、そんな日が来るまで、グレイスヴィルまいづるの「シリーズとつとつ」は終わらない、と言うより終わりたくないし、さらに出会いを重ねて変貌するかもしれない、と思うと、どこまでもいつまでも終わりはないかもしれない、と思い始めている。

4.2 笑う舞鶴（西川勝）

本稿の共著者が集まって、いろんなアイデアを出し合ったときに、実践報告として投稿することはすぐに決まった。そして、副題である「シリーズとつとつ」実践報告という案も全員が一致できた。しかし、肝心の本テーマに関するアイデアが、なかなか出てこなかった。あれこれ考えても、すっきりした提案ができそうにないと、みなの表情が告白していた。そのうえで、誰が言うともなく「笑う舞鶴」ということばに落ち着いた。なぜ、こんなテーマが出てきたのか不思議だが、なにしろ「笑う舞鶴」ということばを口にするだけで、その場にいたみんなの気分が軽くなり、明るい笑い声さえ出てくるのだから、これで決まりということになった。悩んだ末にしては、あっけない結論だった。

「笑う舞鶴」を説明することは難しい。ここには理屈やことばで共有できる明確な考えは

ない。しかし、「シリーズとつとつ」に関わった全員が一緒に笑えたということが大切なのだ。

まいづるRBが企画した「とつとつダンス」に共著者たちは、それぞれの興味関心とそれぞれの目的や意図をもって関わりはじめた。あるひとつの目的に対して、あらかじめ綿密に計画されたアイデアに基づき、それぞれの役割を分担して組織だった実践を行ったわけではない。

まいづるRBは、舞鶴という地域の資源を活かし「地域の文化力」を育むために、市民がネットワークを結びながら豊かな地域社会の実現を目指すアートプロジェクトを展開している。その活動のひとつとして砂連尾さんの「とつとつダンス」が企画された。砂連尾さんはダンサー・振付家として、舞台作品だけでなく近年はソロ活動を展開し、障がいを持つ人や老人との作品制作やワークショップを手がける等、ジャンルの越境、文脈を横断する活動を行っている。ダンスの可能性をさらに追求するために、ダンスと社会の新しい関係を模索する過程で「とつとつダンス」に取り組むことになった。特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」は、「共に暮らし、共に考え、共に感動し、共に働く」をモットーに、施設関係者以外の人が気軽に立ち寄れる場所としての施設運営を目指している。施設長の淡路さんは長く舞鶴市に勤めた経験から「まちづくり」の観点を、高齢者介護の背家に取り入れることに意欲的であった。介護を「地域で共に生きる」という意味で豊かにしようとする理念から「シリーズとつとつ」の強力な推進者の役割を引き受けている。豊平豪は、まいづるRBの活動に関与しながら、舞鶴在住の人類学者として異文化理解の具体例を紹介しながら参加者と対話を楽しむカフェ活動を始めた。大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの西川は、コミュニティにおける新しいコミュニケーション回路を構想する「高齢社会プロジェクト」の一環として調査研究を舞鶴で開始した。特に「シリーズとつとつ」は、ケアとアートの協働が認知症ケアに身体コミュニケーションという新しい領域を切り拓きつつあること、さらに特別養護老人ホームが拠点となって地域の住民を多様な活動に巻き込んでいる点に注目した。

それぞれに異なる出発点を持つ活動が「シリーズとつとつ」へと統合されていく過程を支えたエネルギーは何であったのか、まだ充分に明らかにすることはできない。

はじめから笑いがあったわけではない。まだ何が起きるのかもわからないまま、舞鶴の片隅でとつとつとした動きが生まれていただけであった。とつ、とつ、とつとつ。不連続のような連続のような、しばらく耳をすましていないと聞こえてこない音のつながりが、やがて小さな笑いを誘い出し、その笑いの輪が静かに広がり、うねりはじめて賑やかさを増していく。気がつけば、とつとつは素敵なリズムでみんなを笑いの世界に連れ出していた。見知らぬ者同士でさえも共に笑いを交歓できる状況が切り拓かれてきた。

特別養護老人ホームとダンサーを結びつけた舞鶴での活動は、アートの糸とケアの糸に地

域の糸を撚り合わせてカタンコトンと廻る糸車のようになって、身体と言葉があやなす不思議な色の糸を紡ぎ続けている。

●まいづるRBホームページ
http://maizuru-RB.jp/index.html
●砂連尾理ホームページ
http://www.osamujareo.com/
●特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」ホームページ
http://gracemaizuru.com/default.aspx